
Summer Vacation

如月りお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Summer Vacation

【ZPDF】

Z9490C

【作者名】

如月りお

【あらすじ】

高校に入って初めての夏休みを迎えたかりん。みんなは部活にバイト、そして彼氏と充実した日々を過ごしているのに、かりんには何もない。自分が置いて行かれたようで焦るかりんの遅すぎる夏が始まる・・・！

第一話・恋に恋して

「だあーっ！ もうダメ、休憩しようよ、修兄。ちょっと休憩、ね。」

「オマエ、さつきもそう言つて、アイス食つたばっかだらうが。この問題解くまではダメ。」

「もう、修兄のケチい。そんなんだからカノジョできないんじやん。」

「なにをおーそつ言うオマエはどうなんだよ。」

「アタシは、別につ・・・」

「別になんだよ！」

「こんな言い合いはいつものことだけど。

なんでかな、この頃、ドキつとしてしまつんだよね。

そう、修兄のカノジョの話になると・・・。

修兄はご近所さんで、優しくて、カッコよくって、小さい時から大好きなお兄ちゃん。運動音痴な私とは違つて、テニス部のキャプテンで、おまけに成績優秀で。

いつも女の子が周りにいて、ヤキモチやく氣にもなれないくらい。中学の時から始まつて、カノジョがいない期間なんてなかつた。今は、たまたま、進学してすぐだから、決まつた人がいないだけの話。この夏休みから、高校に入つて難しくなつた数学とか理科の勉強を、理系の大学に進学した修兄に週一で見て貰つている。

修兄のバイトが休みの日で、夕飯済ませてからだから、8時頃から始まつて、その日の気分次第で終わりの時間はマチマチ。

かなりアバウトな家庭教師だ。

全然関係ない話で、かなりの時間を無駄にすることも多い。

そんなどき決まつて、恋話になるのは、お互いそういうお年頃だもん、しようがないよね。

修兄は大学でテニスサークルに入つたんだつて。そのサークルの先輩が気になつてゐらしくて、最近はもつぱらその話。

「やっぱ大学生は違うね。大人だよ、やっぱり。」

いつか回りよつないじとまつかり言つて。

よくいう『大人の女の魅力』つてやつに、ヤられちゃつてつるつて感じかな。

私が見れば、修兄だつて十分大人なのにね。

輩の話は続く。

さすがにちよつとムカついてきて、

「そんな」好物なら瓶詰づねを貰ひに来的り、
つゞいて、櫻寿司を貰ひに来たが。

すると、意外にマジに返事が返ってきて。

「レイナちゃん、じゃあ、どうもカレン」と別れたト「みたいなんだよ

だつて。

「よかつたじやん。チャンスなんじやないの？」

「う」
二
・
・
・
・

九、

向こうが社会人になつて時間合わなくて、仕方なく

心がまだ残つてゐるがわからんぢよな。・・・。

ちょっと、そんな切ない顔しないでよ。

「頑張って！」なんて励ましてもウソになりそうで、何も言えなか

「修兄、今日のデザート何？甘いモノ食べたら、元気出るでしょ。」

ヒーリングやマナフリするしかなくて。

勝手にテーブルにどんどん並べ始める。

「じゃんけんして、勝つの方から好きなの取つていくんだよ。」

「オレはどれでもこいけど、部活もしないでそんなに食つていいのか？」

ちつとは気にしろよ、体重とか。」

意地悪そうに笑つて、私を後ろから羽交い締めにして持ち上げてみせた。

「重い。」だつて。

修兄のすることは、時々際どく参つてしまつ。

私だつて、もう結構お年頃なのに、修兄にひとては、まだまだ子供なのだらうか。

難しい問題に正解すれば、頭をなでてくれて、私が甘えれば、修兄のアイスを一口食べさせてくれる。

修兄が疲れたつて言つて、膝枕をねだつてることもあるし。私一人でドキドキするのは悔しいから、ヘーキな顔するけど、内心はもう心臓バクバクでビーッしそうもない。

私のことからかつてるのかな？

聞きたいけど、それだけは聞けない。

聞いてしまつと、もうこんな恋人じみたになこと？全部終わつてしまいそうで、黙つてるしかなくて。

そんな疑問も恥ずかしさも、何もかもなかつたことにして、

「よおし！勝負だ、修兄。」

始めてしまえば、こいつのもの。

私がどこまでも無邪氣な子供でいれば、修兄も笑つてくれるかな。

第一話・夏が始まる

他に楽しみなんて何にもなかつた。

望月かりん、15歳。

高校に入つて初めての夏休み。

もつとワクワクするような出来事が、いっぱい待つてると思つてたのに、現実は違つてた。

もう三分の一が過ぎようとしているのに、ただ暇で暇で仕方なくて、毎日暑いだけの夏休み。

週一回、水曜の夜の修兄の家庭教師だけが、私にとつての唯一のイベント。

友達はみんな、こじぞとばかり彼氏と毎日遊んでんだろーな。メールしても全然返してこないし、もう、いちいちケータイ見るのもバカらしくなつて。

ホント女同士の友情なんてあてにならない。

なんであたしは暇のかつて、そう、彼氏がいないからなんだ。

『ま、それだけが理由じゃないのは、わかつてんんだけど。』

みかはクラスのコと付き合い始めて、ゆつきは部活の先輩と、中学校からつきあつてるのもいれば、

友達の紹介で・・・つてパターンもあるし。

高校生になつたんだもの、当然、周りには新しい出会いがいっぱいなのに、

なんであつ?私にはないわけ?そつゆつの。

そりや、運動音痴をいいわけに部活には入つてないし、親がつるさくてバイトもやってないけど、

それでも高校に入つたら、新しい通学路、新しい教室、新しい友達ができる、カツコイイ男の子に巡りあうハズ・・・
だつたんだけどなあ。やっぱ塾の夏季講習でも行つとけばよかつたかな?

なあんて田口シマな反省してたら、グルルル……とお腹のなる音。一体今何時なのかもわからないけど、体の方はわかってるみたい。

「お母さん……は行っちゃったよね、仕事。」

重い足取りで階段を降りていいくとリビングのクーラーは当然切られているし。

「うつそ、あつちー。」

冷蔵庫からミニネラルウォーターを取り出しつつ、クーラーのリモコンを押した。

壁のカレンダーを指でたどって、

「ええっと、今日は、火曜だから……」

残念。修兄に会えるのは明日だ……。

確か新しいデザート、CMでやつてたよな。

修兄と二人で、品評会しながら食べるの楽しみなんだよね。つて食べ物のこと考えてたせいかな。

もう一度、グルルルル。

時計はもう十時半をまわってるんだもん、当然だよね。

喉を通り過ぎる水の冷たさにクラクラしながら、一応メールをチエック。

「新着メールあり」

久しぶりに見たよ、この文字。

えーっと? みかからだ。

「今日暇してる? プール行かない?」 だつて。

うふふつ。私は思わず口元がほころんだ。やつと私にも予定ができるたのだ。

しかもプールだよ!! なんて夏らしいイベント! 新しく買った水着、まだ一回も着てないんだよね。やつとこの日が来たよ。

おつと、うれしすぎて返信忘れるところだつた。

「行く行く!! つて今起きたんだけど。間に合つ?」

そう、時計はもうすぐ十一時。

「十一時半に駅だよ。ヒロ君の友達も呼んだから。」

「えーーっ。」

私は思わず声をだしてしまった。みかと二人じゃないの? 友達って誰?

なんでよりによつてプールなの? 恥ずかしいんだけど・・・。色んなことを考えながらも、とりあえずパジャマ代わりのTシャツを脱ぎにかかる。

後三十分で何ができる? とりあえず朝食はぬきだよね・・・。もう洋服も選んでられないよ。

クローゼットを開けて、目に付いたワンピを頭からかぶつた。お姉ちゃんのだけどいいよね。着替えるのラクだし。

「バスタオルに・・・日焼け止め、あとは何がいるんだろ?」口に出していくつてみるけど寝起きで頭が回らないせいか、いつこうに準備が進まない。

「どうしよう、間に合わないかも~」

なんで起こしていくんなかつたの? つて、思わずお母さんを恨みつつ。

駅まで自転車でダッシュすれば五分で着くはず。時計は十一時二十分。

マイクもいい加減に玄関の鍵を閉めた。自転車にまたがつて、

「あっ。ケータイ忘れた。」

もうカンベンしてよ。これで一分はロス?

今度こそ大丈夫だよね、忘れ物ないよね。

気を取り直して自転車をこぎ始める。

だんだんスピードがでてきていい感じ。

いつもはウンザリするほどつるさこせこせの声も、今日は夏らしく思えて許せた。

ようやく、私の遅い夏が始まつとしているみたいで。

せっかくノッてきたところで、田の前の青信号が点滅して赤に変わる。

変わるとわかつているのに、間に合わないなんて！

我ながら体力なさすぎだわ・・・。

ブレークをかけながら、『約束には間に合うからいいよね』なんて、自分で自分に言い訳しまくりで一休みしてたら、

「おーい」

つて後ろから誰かの呼ぶ声。私じゃないな。

「おいつてば。」

つて、もう一度。

早く誰か振り向いてあげたらいいのに。

汗だくの顔をあげたその時、キキキィー。

銀色の自転車がブレーク音と共に、私の横で止まつた。

「おはよ。」

逆光で、その顔は良く見えなかつた。

けれど私には声だけで誰だかわかつてしまつて、そのままじぱりく動けないでいた。

信号が青に変わつても、この暑さの中、フリーズしたまま。

「行くぞ。」

そう言つて、私の目の前を彼の背中が小さくなつていぐ。私は慌ててペダルを踏んだ。

彼、早川孝は私の高校生活の中で、唯一新しい出会いと呼ぶにふさわしい、

現在、気になる男の子第一位である。

サッカー部に所属する彼は、学期中に既に、かなり日に焼けていたけど、

今日久々に会つてあまりの黒さに笑いそうになつた。
だつて歯だけがやたらと白くて。

この暑いのに毎日部活なんて、ホント信じられないワ。
彼を好きなのかどうかはよくわかんないけど、
よくいるサッカー小僧のように、髪を染めたり伸ばしたりしていな
いところはとりあえず好感もてた。

それにしても、『あれ、こんな時間になんで？今日部活休みなのかな・・・、私服もカツコイイかも』
ぽんやりした頭で、ぐるぐると同じ事を考えながら、足はひたすらペダルをこぐ。

『どこ行くのかな？』

朝食を抜いたのがマズかったのか、もうバテてきちゃってる。おまけに上り坂で、

『追いつけない、もうムリ～。』

ふらふらしながら顔を上げてみると、さつきのT&HのTシャツ？
「おせえぞ！～！」

つて、待つてくれた？私を？

心臓がバクバクいってるのは、自転車こぎすぎたせい。
顔が赤くなってるのも、自転車こぎすぎたせい。

なわけないけど、それでも平気な顔しなきゃ。

早川とは中学から同じだったけど、一度も同じクラスにならなくて、顔と名前は知ってるって程度。

だから初めて話したのは高校入ってから。

同じクラスになって、隣の席で、正直、第一印象は、あんまり・・・

かつこいって有名だったから、みんなには羨ましがられたけど、きつとやな感じのヤツなんだろうなって、勝手に思つてた。

『俺つてカツコイイ。』って、自分で思つてるようなヤツ？

まあそれが誤解だつてことがわかるのに、時間はかからなかつたんだけど。

どうしてなんだろ、キャーキャー言つまわりの女の子にも興味なさげだつたからかな？

こないだも言つてたしな。

『サツカー忙しくつて彼女作る暇ねえよ』って。

そんな一言に、ガツカリしたり安心したりして自分がいて。

『おはよ～。』

よかつた。普通の声が出た。

「お前もうバテてんだろ。体力なぞ過ぎ。そんなんで泳いだりできんのかよ。」

「え、？」

今、

「泳ぐ」って言った？泳ぐってどこで？？？プールで？

この坂を下れば、もう、駅なんだけど・・・、

「もしかして、プール・・・？」

カラカラの喉が余計に乾いて、声にならない。なぜかニヤニヤしながら頷くアイツ。

この怪しい笑みに気がつく余裕は、この時の私にはなくて・・・

「あんたって、ヒロ君はどういう・・・」

二人そんな仲よかつたつけ？

まだ頭がはつきりしない。栄養不足の上に酸素まで不足しているから、

働かせようとする方がムリなのかも。

「ああ、アイツとは中学から塾で一緒にああ・・・」

その先の話はもう耳に入つてこなかつた、といふか聞いていなかつた。

塾なんて私の生活リズムの中にはないから見落としてたワ。

なんてことだ。テキトーな服にテキトーなメイクでテキトーな髪で早川に会つちやつて、

それだけでも終わつてるのに、そのままプールまで一緒に行くなんて！！しかも水着だよ。

なんで教えてくんなかつたのよ？みかのヤツ。来るのが早川だつてこと。

怒りと恥ずかしさでカーツとなつてきたと思つたら、あれ？突然目の前が白く光り始めた。

目の中で小さな花火がいくつかあがつたと思ったら、あれ？突然目の前の景色が、テレビの砂嵐みたく、どんどん細かい粒になつて、

「キーン」つて耳鳴りの向こうからアイツの声がした。

「おい、お前大丈夫か。おい、望月、望月つ・・・」

ドサツ。ガツシャーン。

私が受け止められる音。自転車が倒れる音。

そこから先は蝉の声だけが聞こえていたような・・・

第三話・はめられた二人

「うーん……。」

なんだかくすぐったい。なんだろう。

うつすら目を開けると、タオルをバタバタさせて、懸命に私をあおいでくれている早川がいた。

「あ、れ? なんで?」

状況が理解できていない私に、

「お前がいきなり倒れるからだろ! 仕方ねえから、ここにまで運んできたんだ。」

あ、自転車はとりあえず置いてきたからな。」

「えーっ。自転車置いてきたの?」

「当たり前だろ。氣い失つてるヤツ一人残して行けるかよ。だいたい普通はありがとうって言うのが先だろ。」

ごもつとも。荷物はちゃんと持つてくれてるし。

「ありがとう。重かつたよね……。」

「重いっていうより恥ずかしいんだよな。お姫様だつこつていうの?」

だんだん声が小さくなる。

照てるんだ。カワイイ。

なんて思いながら、自分がお姫様だつこされてるトコ想像してみたら、

こつちも恥ずかしくなつてきて、

「ごめんね。恥ずかしいよね。」

つて小さな声で言つた。なんか顔見れないよ。

「お前や、・・・朝飯食つてねーだろ。」

う、つ。声が怖いよつ。ごめんなさい……。

それにもしても、今顔赤くしてたのに、もう復活してるよ、悔しい。

「人間の体つてよくできるよな。氣い失つても腹は鳴るんだも

んな。

「ふーん。すごいねえ・・・。

つてそれってもしかしてあたしの事ー?「モーツー。」

思わず飛び起きそうになつて、クラクラしてあきらめた。信じられない、というより信じたくなかった。うそでもいいからつ

そだつて言つてよ!

「他に誰がいるんだよ。ま、俺も腹へつてんだけど。」

クールに言ひ放たれでは、もう開き直るしかな。」

「何よ。その分軽かつたんだから、よしとしようよ。」

「なんだよ。逆切れかよ。つたく、これだから女はヤなんだよ。」

そう言ひながら立ち上がると、

「ちよつと待つてろよ。」

そう言ひて、公園の外へスタスターと出て行つてしまつた。

やつてしまつた。謝らなくひきびつ考へても私のまづが悪いんだ

し。

もしかして怒つたのかなあ。なんて言ひて謝ればいいんだろ。

（ん、眩しい・・・）

アイツがいなくなつて、やつと周りの景色を見回す余裕ができた。正確に言ひれば、アイツがちょうど光を遮るよつに座つていたから、私はその心地よい日陰の中で、人の目も気にすることなく、まづりんでいたのだ。

（優しいな。）

それにもしても、こいつて見たことあるよつな・・・

公園？確かにさつきよりまだ坂の上にある・・・

私が横になつているベンチにまづちゃんと口よけもつて、足元にはバスタオルがかけてあつた。

（優しい。）

こういう所が優しいんだよね。

でも、それは私が特別なわけではなくて

ただ誰にでも優しい罪なヤツなんだよね、この男。

しかも、自分で全然それに気が付いてないんだもんな。

こんなヤツの彼女になつたら、毎日不安で仕方ないかも知れない。
行く先々でいろんな女の子に優しくして帰つてくるんだから。

（もちろん女の子だけじゃないのだけれど）

でもそこがイイのかもね・・・なんて矛盾してゐる。

そういうトコちよつと修兄に似てるかも。

「オマエ好きなヤツとかいないのか？」

修兄に聞かれた時、一瞬、早川君の顔が頭に浮かんだ。

「オレなんかいっぱいいたけどなあ。

どつちかといつと、いっぴいに悩むタイプだつたな。うん。」

「いっぽい、ねえ。」

修兄の好きなタイプってどんな女の子なんだろう。

そんなことボンヤリ考えてたら、また蝉が鳴きだした。

「おー、起きられそうか？」

ずいぶん頭の上から声がしたと思つたら、自転車に乗つてゐるんだ。

「お前のも取つてくるからちよつとこれ見てて。」

そういうつてまた走つていぐ。

後姿に

「サンキュー」つて言つてみた。

聞こえるわけないか。

そつこえぱさつき、

「これだから女は」 つて・・・

女。ちょっと胸がズキッと痛む。誰なんだろ？お母さん、お姉さん、妹、彼女。

アイツの言う女つて一体・・・

つて、ダメダメ。完全に恋愛モードに切り替わつちやつてるよ。

あたしとアイツは友達なんだから。いや友達っていうより、ただのクラスメートか……

とにかくスイッチ入れなおさなくちゃ、普通にしゃべれないよ。考えるのはヤメにして、起き上がってみることにした。

（一体今何時なんだろ？みか達心配してるだろうな……）ゆっくりと体を持ち上げながら、頭を振つてみる。

うん、大丈夫みたい。

カバンの中をのぞいたら、ケータイがチカチカと点滅しているのが見えた。

新着メールあり。

「遅いから、先に行くね。あと、男の子もまだだから、駅で待つてあげて。」

何これ……冗談？じゃないみたいだけど……

この期に及んでもまだ『男の子』とか言っちゃってるし。

だいたい遅いってまだそんなに時間経つてないんじやん？

現在ケータイの時間表示は12：03だから、33分の遅刻……はは・・・これは遅すぎか。一体どれくらい寝てたんだろう。

その間ずっと私のことあおいでくれてた？

「おーい。

いいこと教えてやろうか。」

きっとヒロ君からもメールがきたんだろう。

片手でケータイ振り回しながら、私の自転車に乗ってるアイツ、何だか変な景色だ。

「もう知ってる。」

こっちもケータイ振り回して見せた。

「なんだ、ジュース飲むか？」

ちょっとがつかりして言つと同時に放り投げられる缶ジュース。冷たくて気持ちいい。

「あ、お金……」

「それぐらごお！」ねぶ。 ラッキー。

「いただきまーす。」

ペコリとおじぎしたら、

「くくっ。今時そんなこと言つヤツもいるんだ？」

バカにしたような笑い方。感じ悪い。

「なに？なんかおかしい？普通だよ、当然でしょ。ちょっとこいつまで笑つてんの！」

どうにも怒りきれてない自分がはずかしくて、言葉がキツくなる。やばい、顔にやけてないかな。

「お前すぐムキになるのな。おもしろいよな。」

バカにされた上にからかわれてるし。

「・・・」

どうしよーー何だかうまく言ひ返せないよ。

教室では平気な顔で話できても、この状況はかなりヤバイ。制服じゃないし、学校じゃないし、何より一人きりだしー！あせればあせるほど心臓バクバクだよ。とにかく沈黙だけは避けなきや。

「つたくあいつら最初から待つてる気あつたのか？」
ほつ。向こうから話してくれた。

でも、そういうわれてみると怪しいかも。

まさか、みかつてば・・・

最初からコイツと二人きりにさせる気だつたんじゃ・・・?
なあんてね、そんなわけないか。そんな無茶なこと、いくらみかでもねつ。

だいたい早川のこと好きなんて、一度も言つたことない！
まあ、何度かつつこまれたことはあるけど・・・

「かりんつてわっかりやすいよね！」

みかの声が聞こえてくるようだ。

何がわかりやすいんだかわたしにはさっぱり。

今こうして早川が気になり始めたのも、半分はみか達の暗示にかけられたようなもんだし。

「どんなに否定しても、みんなして、

「絶対怪しいよね。」とか、

「仲いいよね。」とか、

「つきあってるのかと思った。」なんていつまでもいたし・・・そりや嫌いじゃないし、話してて樂しいけど、だからって

「好き」とか、

「つきあいたい」とか、そこまでは正直わからないうつていうか・・・今のままじゃ、ダメなのかな？

「俺らが邪魔なら誘わなきゃいいのにな。」

目が相づちを求めてたから、慌てて頷いた。

なるほど、そういう意味か。そっちのが正解だわ。

自分本位な早とちりに思わず耳がかーっとなる。

「あたしのせいだね。ホントごめん。」

まさかの意味も込めて、とりあえず謝る」と云った。

「ま、いいんじゃねえの？」

あ、またニヤニヤしてる。何なの今日は？「こんな顔普段見たことない。

「さあ、どうやつて弁償してもらおうか。俺の貴重な夏休みを！」

何のことだかさっぱりわかんないって顔して見せたら、

「俺また明日から部活なの！毎日サッカー漬け。

あーあ、今日楽しみにしてたのになあ。水着の女の子でいっぱいのプール。」

横目でチラ見したら、嬉しそうな顔しちゃつて口吻によ・・・間違いなく何か企んでる顔だ。いつたいどんな償こせせられるの？こんな事なら簡単に謝らなきゃ良かつた。

「あ、俺、海行きたいんだけど。夏と言えば、プールもいいけど、やつぱ海でしょ。」

ちよつと待つてよ！なんか訳の分からぬ方向に話が・・・。

「は？今からそんなトコまで行ってたら、遅くなっちゃうよ。無理

無理。」

「なんだよ。世界一暇なくせに！…それとも何か予定あるのかよ。」

「グサリ。いきなり核心ついてくるとは。」

「失礼ね！私だって色々あるんだからね。忙しいんだから、色々・・・」

・

「ふーん、色々ね・・・。ま、どーでもいいけど早く行こうぜ。時

間もつたいねえぞ！」

「ちよつ、ちよつと人の話を聞いてんの？ねえってば、ねえ～！」

第四話・隣の席

結局断り切れなかつた。

にしても、なんて強引なの！そしてそれに逆らえない自分がいる。もう少し一緒にいたい気持ちを、認めざるを得ないのが悔しい。

『見透かされてる？絶対付いてくると思われてる？』

簡単な口だと思われたくない、余計なプライドが、私に笑顔を作らせないでいた。

「そろそろ見えてもいいのにな。」

揺れる窓の外ばかり見てるアソツが腹立たしい。窓に映つての自分の顔はもつと。

どうしてもはしゃげない。せっかく来たのに、楽しめない。こういうときホントに恨めしいよね、自分の性格が。傷つきたくないって、全神経が訴えてるみたい。

電車の中は、平日の昼間だからか、人はまばらで、私たちはガラんとした車内の、暑苦しいベルベット地の椅子に、少し離れて座つていた。

電車に乗り込んですぐは、

『こんなのも『テート』って呼べるのかな？みか達に感謝しなくちゃね。』

なんてウキウキして、

『私にも何かが起ころるかも』

とさえ思つたのに。

扉が開いて、誰かが乗り込んでくる度に、

『私たちってどう見えるのかな？なんで私を誘つたんだろう？』

つて、なかなか着かないから、なんだかどんどん考え込んでじやつて・

・

『そりいえばメアドもケータイ番号も交換したきりだし・・・これつて友達以下かも？』

「ああ、もうダメー！恋愛モード全開だー！早くスイッチ切らなくしゃ。」
「考えちゃダメなんだ。とにかく、話してれば大丈夫、なはず。」

「あ、そういうとこえればもう夏休みの宿題終わつたー？」

「まだ。」

「みかとヒロ君、もう泳いでんのかなあ。」

「だらうな。」

「今年の夏つて、去年より暑いよつた氣がするんだけじ
「よく喋るなあ、お前。」

え。

なんかその言い方ムカつく。

「そんなんに頑張つてしゃべんななくていいから。黙つて座つてねよ。」
「何なのそれ！ そんなのもつと早く言つてよねー。
アタシがどれだけ苦労して、話題思いつく限りしゃべつて、
沈黙が訪れないように頑張つたと思つてんのー。
悔しくてちょっと泣きそうだつた。」

その時は、彼の言葉のホントの意味に、気が付く余裕などなくて・・・

・
「わかった。むづむづとへしないから。」

聞こえたかな？ なるべく低い声で、呼吸を落ち着かせて言つた。
じやないと震えが伝わつてしまつた。泣き声に変わつてしまつ
そうだ。

「は？」

やつぱ聞こえなかつたか・・・

「うるさいなんて言つてないし。ただ、お前が無理にわ・・・」
言いかけて、言葉を探しているように、視線をさまよわせる。
しばらく考えて、彼は言つた。

「なんかいつもと違うから、調子くるつづーか・・・
教室で隣に座つてるとおんなじだろ？ 今だつて。
「わかった。」

もう早くこの話題は終わらせたから、とりあえずそう言つて、

うつむいた。

ホントは全然わかんないんですけど。教室とおんなじって？ふと横を見たら、肘をついた姿勢で、ぼんやり窓の外を見る。

いつものポーズだ。

『確かに同じだわ。』

どーせ授業なんて聞いてないんだもんね。私の話の方が、無視できない分厄介かも？なんて考へてる間も、ずーっと横顔を見ていたら。あれ？なんか違和感。

そつか。左右が逆なんだ。だから、見慣れない横顔。いつも教室で、アタシは左側から早川の横顔を見てるんだ。ふと、さつきの言葉が頭をよぎる。

「そんなんに頑張つて・・・、

無理に・・・、いつもと違う・・・。」

うーん、ここ引っかかるんだけど、なんでかな？

どんどん自分一人の思考の中に沈んでいこうとしていた私を、思わず彼の一言が引き戻す。

「無理に連れてきて悪かったかな。」

グサリ。穏やかな口調だけれど、それがかえつて胸に刺さつた。この言葉だけは言わせたくなかつたな。きっとアタシが困らせてるんだね。

「全然！平気平氣。あたしも暇だし。」

できるだけ元気に言つたつもりだけど、嘘にしか聞こえなかつただらうな、今の。

もう言葉が続かない。お願い、誰か助けて！

そのとき、

「おー見えたぞー！見えたーほら、見てみるーおいつてば。」

海だった。

流れしていく木々の中に、ときれときれに顔を出す、キラキラ光る波

のかけらが、だんだん大きくなる。

「す」「おいーきれーい。やつたあ。」

「だーから海のがいって言つただろー」つむーつ、やつぱいよなあ。」

窓を大きく開けて、身を乗り出し、私たちは子供のようにハシャイだ。

「お前、やつと笑つたな。」

「え?」

「電車乗つてからずーつと、ノワイ顔してゐからう。」

「え?」

言われなくてもわかつてゐつーの。

こつちはそのノワイ顔と、ガラス越しににらめりじつぱなしだつたんだから。

(あれ? よく考えたら、早川も、今やつと、笑つた?)

アタシの緊張がうつっちゃつてたのかなあ・・・

「お腹空きすぎて、ちょっと気持ち悪くなつただけだよ。でも窓あけたら、すーととした。何か元気出てきたみたい。」

「よおーし。んじや、泳ぐぞーつ。」

「その前になんか食べたいんですけど・・・」

「わかつてるつてー溺れられたりしたら、じつちが大変だからな。いつもの私たちらしい会話がやつとできた気がして、ほつとする。ずっとギクシャクしてたのは、私が変に意識しすぎてたせいなんだ。普段通りの私でいって言いたかったんだなあ、きっと。他に言い方あるだろうつて気もするけど、まあらしさと言えばらしいのかも。

憎まれ口叩きながらも、実は結構優しいヤツ。

じつと座つていられないのか、座席から立ち上がり、ドアの前に立つて横顔から田が離せなかつた。

キュンつて胸がしめつけられて、ずっと見ていたい気持ちがして、もうそこまで海が近づいてゐのに、このままもうちょっと乗つてい

たいよつな。

乙女心は自己中心的だよね、自分で言つのも何だけど。
でも、早川のこと、なんとなく
「好きなのかな?」 ぐらりにしか思つてなかつたのに、
どんどんホントの

「好き」になつてゐる氣がするんだけど、氣のせいかな。
こんなに長い時間一人でいたのは、初めてだけど、なんか居心地い
い感じで。

その気持ちに素直にならなきやダメなんだ、きっと。
なぜか今日はそんなふうに前向きに思えた。

積極的にはなれなくても、後ろ向きになる必要ないよね?

海の家で水着に着替えながらも、私の心の中はどんどん議論を続けてる。

夏休み直前の昼休み、お弁当食べながらみんなで話してたこと、思い出したりして。

いつものことだけど、みんながカレー「好きな」の話しても、何か、イマイチノれない私。

「早川とつき合っちゃえば? かりんつてば、あんなに仲いいんだからね。」

なんて、勝手に進められる強引な話にも、全然気分は盛り上がっていないかず。

「えーっ。別に、フツーだよ。だいたい、好きだなんてあたし一言も言つてないし……。」

つて反論したら、すかさずゆうきが、
「前から聞きたかったんだけど、かりんは、ホントは修兄のじゅうきゆうことが好きなんじゃないの?」

「あ、あたしも怪しいと思つてたんだ。」

「ちょっとなんでそうなるの? ゆうき。なつちゃんも、違つからねー。修兄は、そりやちつちやこ時から、ずっと好きだけど、ただ憧れてるだけだよ。

つきあつとか、わあゆう好きじゃないんだから。変なこと言わないで!」

ちょっと強く言い過ぎちゃったかな。

なんかみんなしんとしちやつてるんだけど。
反省しかけてたら、

「そんなに強く否定されると、ますます疑いたくなつちゃうよねえ。

「つて、全然堪えてなくつて。」

それどころか、みんなゆうきの意見にうんうんって頷いてたし。

なんで、そうなるわけ？私の話、聞いてた？

「よくわかんないんだけど、憧れと好きってどこのがどう違うの？

一緒にいてドキドキしたらさ、それは、好きって事にならないの？」

今度はみかまで、そんなこと言ひ出す始末。

「だから、やつきも言ひたでしょ。

好きは好きだけど、別につき合いたいとかは全然思わないってことだよ。

そういうの憧れって言わなー？

みんなだつているでしょ、そういう人。憧れの先輩とかさ。」

「ここで負けるわけにはいかないから、一気にまくし立てた。

「ふーん。なあんかごまかされてる気が・・・」

「しない、しない。」

なんとか話をおさめたところで、

「おじつ、望月。ノート貸してくれ！英語オレ今日絶対当たるって。

早く早く。

超タイミング悪い、早川ー！

みんながニヤニヤしてるのが、見なぐてもわかつた。

「サンキュー。」

つて、アンタは去つていくからいいけど、残された私はどうなるわけ？

「今の見たでしょ。アイツは私をノート貸してくれる便利なヤツくらいでしか思つてないんだから。

どつちもその気がないんだから、つき合つ以前の問題でしょーが。

先手をとつて、この話題、終わらせようとしたんだけど。

「ばかだねえ、かりんは。そんなこと言ひてるウチに、誰かに早川持つてかれちゃうよ！

ああいう部活一筋の男子は、向こうから誘つてくるなんてあり得ないんだから！

ほつといったら、ただの仲イイ友達で、3年間終わっちゃうよー。これぐらいの年の男の子って、たいして好きじゃない女の子でも、押されたら簡単につきあつたりしちゃうもんなんだからねー。」

「ちょっとアンタ、一体何者なの？」
「横から、みかが突っ込んでたっけ。

「これ、おねえちゃんの受け売りなの。
でも、説得力あると思わない？」

そう言つてゆうきは舌をペロリと出した。

『好きじゃない女の子・・・か。』

ちょっとテンション下がった状態で、着替えを終えて、早川を探してみる。

パラソルばかり目立つてカラフルで、こんな中からビリヤツつてみてみる。

「遅い！」

つて、部活の先輩ばりの、気合いの入った声がする。

「また、倒れてんのかと思つたぜ。」

ぶすつとして、怒つてるのかな？

「「めん。」

キミのこと考えてましたとは言えないし。

「ほら、行くぞ。早くパラソルはいらないと、オレまでぶつ倒れそうだ。」

いつの間にか借りてくれたらしいパラソルを肩にかついで、適当な場所を見つけに走つていった。

「さすが、サッカー部。」

そんな言葉で片づけるのは申し訳なかつたけれど、さりげない優しさが、くすぐつたかつたから。

「ちょっと、置いてかないでよおー。」

大声を出して、照れを隠すのが精一杯だった。

もしかしたら、向こうも照れていたのかもしれない。

一応私はビキニだつたし、なんて、それは自意識過剰かな。

大急ぎで用意したバッグの中に、ビニールシートが入つて助かった。

焼けるように熱い砂の上に、そのままなんてとてもじゃないけど座れない。

少しは役に立てよかつたと、ほつとする私の隣に早川が腰を下ろした。

「あつちいなあ。」

眩しそうに田を細めてるけど、嬉しそうな顔してる。

ホントに自分の肌が、日に焼かれてるって実感できるほど日の日差しだといふのに。

「望月、日焼け止めちゃんと塗つとけよ。」

お前普段外出でねえんだから、多分大変なことになんぞ。」

「あ、そつか。 そうそう、日焼け止めだよね。」

塗らなきゃいけないのはわかつてる、わかつてるんだけど……。 どうやって塗つたらいいの？ 背中なんて自分で塗つたことないけど、届くのかな。

まさか早川には頼めないし、自分でやるしかないよね。

とりあえずの日除けに、頭からバスタオルをかぶつて、サウナ状態の私の耳に

「修くん。」

つて、鼻にかかるような甘い声が聞こえてきて。

『ま、まさか、だよね。』

せつせと日焼け止めを塗る早川の陰に隠れて、バスタオルをそつと持ち上げてのぞき見る。

変な汗がじわじわ出てくるのを感じながら、声の主を確認した。
「待つてよ、修君。歩くの早いつてば、ねえ。」

ホルターネックの白のビキニを着て、Tシャツ姿のカレの腕に絡み

ついてる、スレンダーなカノジョ。

華奢な身体に不釣り合いなくらいの大きな胸が揺れている。

「早く戻らないと、オレが文句言われるんですよ。かき氷溶けちゃつたらマズイっしょ。」

胸にかき氷を抱えて、申し訳なさそうに言い訳しながら、カレがカノジョを振り返つて・・・。

「修兄・・・。」

早川が側にいるのも忘れて、声に出していた。

「え、何？知り合い？」

幸い私がどこを見て、そう言ったのか、カレには分からなかつたみたいで。

視線をさまよわせてるうちに、一人を見つけたのか、

「うおっ。すげえ。見てみろよ。

やっぱ白つてのは、自分の体に自信がある人だけが、着るべきだよな。」

自分で言つて自分でうんうんと頷いている。

何よ。水着の女の子が見たいなら、男友達と来ればいいでしょ！

興奮しちゃつて、バツカみたい。

結局男はみんな、ああいう女に弱いつてことなの？

こんなところで会うなんて・・・。

修兄は、あの人の方が好きなんだ。

あんな人・・・大人っぽくて、スタイルよくつて、きれいなあの人。

嬉しそうな顔して、笑つてたなあ。

結構うまくやつてるんじやない。

そんなこと全然知りたくなかったのに。

そういえば、

「レイナ」つて、名前を教えてもらつた時も、そう思つた。

「おい、望月？大丈夫・・・か？」

バスタオルを引つ張られて、眩しさに我に返つた。

「ん? 何でもない、何でもない。」

「なんだよ、また気分悪いのかと思った。」

「だあいじょうぶつ!」

それより、よそのお姉さんジロジロ見るのやめてよね。
恥ずかしいから。」

「ごまかそうとして話をすり替えると、

「オマエだつて、よそのお兄さんジロジロ見てんじやん。」
うう~、バレてるよ。

「アンタと一緒にしないでよね。

ちょっと知つてる人に似てただけです。」

似てるどころか本人なんだけど、とてもじやないけど言えないし。

「あ、そう。んじや、オレなんか食い物買つてくるから。望月、何
食う?」

「えっと、私は・・・焼きそば!」

「OK! 焼きそば大盛りね。」

「大盛りなんて言つてなあい!」

「いいからいいから、無理すんなつて。」

言いたいことだけ言つて、さつさと走つていつた。

「ありがと。」

つこわつきのイヤな気持ちを一気に吹き飛ばしてくれる、不思議な
ヤツ。

一人残された私は、また口焼け止め片手に悪戦苦闘を始めた。

どうしても背中の真ん中には手が届かない。

「手伝いましょうか、お嬢さん?」

パラソルの陰になつて首から下が見えるだけだつたけど、
差し出された手には、見覚えがあつた。

「修兄・・・。」

「オス。何やつてんの? こんなトコで。ナンパされに来たのか?」

「冗談にしてもヒドイ。」

「え？ あのね、あの、クラスの友達と一緒に来たんだけど、今ちょっと、買い物に・・・」

「なんで？」

まさかさつき、修兄、アタシに気づいてたの？

「ふーん。かりんのクラスの友達って、男なんだ。」

「ニヤニヤしながら、目線が早川の荷物を捉えてるのがわかった。」

「う、うん。男の子もいるよ。みんなで来たから。」

修兄だつてそうなんですよ。アタシ見ちゃったんだから。

よかつたねえ、レイナさん一緒にさ。ホントきれいな人だよねえ。

修兄つてば、鼻の下のばしちゃつてさ。」

話を修兄の方に持つてくしか、逃げ道はない。

からかうなつて怒られるかと思ったのに、

「だる、だる？ ウソじゃなかつただろ？」

やっぱレイナさんは、ガキのかりんから見てもキレイなんだなあ。そうかそうか・・・。」

まるで自分の事みたいに、威張つて言つ修兄にかなりムカついて、「はいはい、よかつたね。愛しのレイナさんが待つてるよ。早く行きなよ！」

ホントはあんな人と一緒にいて欲しくないけど、口が勝手に動いてしまうのだ。

あ、早川が帰つて来ちゃつたらどうしようつ・・・。

急に思い出して、遠くに見える焼きそばの列に一瞬目をやつた。どうやらしばらくは大丈夫みたい。

「ふうん。オレのこと見られたらマズイつてワケ。それって、何かムカつくんだけど。」

いつの間にかパラソルの中に修兄がいた。

至近距離で囁かれた低い声に、心臓が跳ね上がる。な、に？

いつもの修兄じゃないみたい。

「ワイヤー、けど後には引けなくて、
「修兄には関係ないでしょ。」

つて、言つたら、

「関係ないんだつたら、そつ言えぱいいじょん。紹介してくれよ、
かりんの力・レ・シ。」

なんて意地悪なんだろつ。

しかも、困つてゐる私を見て、ほくそ笑んでるし。

「ダメだよ！ダメダメ！つていうかカレシじやないもん。

あのね、これには色々ワケがあつてね、ほら、明日の晩ちやんと報

告するから。

ね？もうお願ひだからあつち行つて！」「
また言い負かされてしまつた。

といふか、自分から白旗をあげてしまつた。

いつだつて修兄にはかなわない。

どんなに背伸びして、生意氣な口きいても、余裕でかわされてしまう。

「そんなに必死にならなくたつて、もう退散するよ。」

私のおでこを指で弾くと、すつと立ち上がりつて、振り返りもしない

で戻つていつた。

心臓が早鐘のようで、頭がくらくらして、気がついたら泣きそうだ
つた。

理由はよくわからな。

修兄がレイナさんのトコロへ行つてしまつたから？

早川とのこと、誤解されたから？

それとも、さつきの修兄が、知らない男の人みたいだつたから？

悔しいけど、修兄のせいなのは間違ひない・・・。

第六話・ユリウスーな四角形

とにかく夢中で焼きそばをほおばる私に、「

「そんなに腹減つてたのか。」

と、早川は呆れてたけど、今は何も喋りたくなかったから。黙々と食べてれば追及されずにするでしょ。

「もう昼飯の時間だもんなあ。オレも超腹減つちやつて。」結局、大盛り食ってるのは自分じゃないの。

「育ち盛りだもんねえ。」

思わず言葉を返してしまつ。

「望月も、もつと食わねえと、成長するべかと」いやしなくなるわ。

つて、今、どこ見て言つてんの？

ああ、もつ、いやらしい！

おつと、感情的になっちゃダメ、冷静に反論しないと。「何でも大きければいいつてもんでもないでしちゃうが。」うーん、何となく自分で言つてて負け惜しみっぽいな。

「大きいに越したことはないと思うけど。」

あ、今の顔、今絶対レイナさんと比べたねーなんてヤなやつ。

怒りの余り固まつてたら、

「ま、世間一般の男はどうだろ？
オレはそんなのどうだつていいけどね。」

だつて。

何？今のセリフは。

もしかして慰めてくれてるの？

つていうか慰められるほどヒドイのかな、アタシのプロポーション・
・・。

逆にいつそう落ち込んじゃいやつ。

小さい頃から修兄にからかわれてた。

「かりんは手も足も体もみんな細くて、モヤシみたいだな。夏だ

つてのに、真っ白いしたあ。」

自分の黒く焼けたたくましい腕を私の横に並べて、スゴイだろって、
よく血運してたな。

「いいもん、どいつせモヤシだから。」

拗ねてパラソルを飛び出すと、

「さあ、今日は泳ぐぞ！

せっかく海まで来たんだもんね。楽しまなくつちや。」

「よし、行くか。」

疲れるまで泳ぎまくつて、死んだように眠つて、

そしたら、今日のこのイヤな気持ちを忘れられるんじゃないからって。
胸の中でグルグルどす黒い渦を巻いている、
自分でもよくわからない、持て余してしまっている感情。
早川には悪いけど、とことんつき合つてもらうからね。
頭の中空っぽになるまで、泳ぎまくつてやるんだ！

なんて、付き合つてもらう相手が悪すぎた。

「ねえ、そろそろ上がりたいんだけど。」

「ええ～つ。もうバテたのか？」

「だつてもう体がふやけるよ～。」

サッカー部の底なしの体力に、毎日家と学校の往復しかしない私が叶うわけがない。

いい加減にしどかないと、ホントに沈んでしまってそうだから、

「何か食べたいなあ。お腹空いた。」

今度は別 の方法で攻めてみる。

「おう。オレも腹減つたな、そいつ言えば。」

やつた！ノつてきた！

「泳ぐのつてすつじくカロリー消費するつて聞いたことあるナビ、

本当なんだねえ。」

ちょっと白々しかったかな？でも早川には効果あつたみたい。

「どうりで腹減るわけだよな。んじゃ、休憩しようっか。」

「うん！」

よかつたあ！やつと、やつと陸に上がれるよ～。

こんなやり取りを何度か繰り返し、私の体力はもう限界だった。

「もうムリ、お一人でどうぞ。」

「なんだよ、だらしねえなー。」

「だつてえ、もう死んじやうよ。」

「しゃあねえな。じゃ、あのブイまでラスト一本で帰つてくるから。」

部活じゃないんだから、ラスト一本つて・・・。

心の中でツツ「ノミ」をいれるのが精一杯。
レジャーシートにつづぶせに倒れ込み、じぱりく動けそうにない。
どれくらいそのままの体勢でいただろ？
じりじりと照りつける日差しがふいに遮られ、背中にふわりと暖かい感触。

バスタオルかけてくれたんだ。

「ありがと。」

「どういたしまして。」

御礼を言おうと振り返った私の頬が、思わず引きつる。
だつてそこに腕組みして立つていたのは、早川ではなく修兄だった
んだもの。

「お前カラダ固いからなあ。」

背中まで、手届かなかつただろ？

ムラに焼けると汚いぞ。」

面白そうに聞いてくるから、じつちもムキになつて、

「そんなことないもん。」

「はいはい。」

あ、もしかして、彼氏に塗つてもらつたとか？

やるねえ、かりん。」

もう、修兄のいい遊び道具と化していく私。

返事するのも馬鹿馬鹿しい。

「うなつたら誰にも止められないのは、長い付き合いでわかっていた。

修兄の好きなようにいじられて、からかわれても、本人の気が済むまで、ひたすら耐えるしかないのだ。正直私は慣れっこだけど、今回はいつもと状況が違う。もつすぐブイまで行つた早川がここへ戻つてくるのだ。この一人を会わせるのは、修兄に新しいオモチャを『』えるようなもので、

それだけは避けたい。

「修兄、レイナさん待つてるんじゃないの？」

「行かなくていいの？」

「一番弱いところを突いてやると、

「おつと、そうだった。

俺らもう帰るんだけど、乗せてつてやつたらつて、レイナさんが。優しいよなあ。」

「おいおい、またおのろけ聞かそつて言ひの~。

「かりん、ラクだぞ、車は。

家の前まで送つてやるぞ。

どうする、どうする？」

置みかけるように囁いてくる修兄の顔。

ううつ、私が即座に領けないことを見抜いて、愉しんでる顔だ。だって、早川だけ置いて帰るわけにはいかないし、当然二人一緒に乗つけてもらひつてことでしょう？

そんなの絶対やだよ。

この拷問がウチに着くまでずーっと続くなんて・・・。

しかも、レイナさんも一緒に、一重の苦しみだわ。断ろう、どんなに疲れ果てていても、

例え座れなかつたとしても、電車に揺られて帰つた方がマシだ。

「修兄、ごめん。やつぱりあたし・・・、

「おー、望月？」

あーあ、帰つて来ちゃつた。

しかも最悪のタイミング。

「おお、ちょうどよかつた。」

修兄が待つてましたといわんばかりの勢いで、早川の肩をグッと引き寄せた瞬間、

私は心の中で、終わつたと思つた。

あの嬉しそうな顔。

きっともう逃げられない・・・。

早川は何も知らないから、修兄に上手く丸め込まれて、簡単に頷いちゃうに決まつてるんだ。

この後に長くてしつこい尋問が、待ち受けているとは、夢にも思つていらないんだろうから。

第七話：一人は恋人？

もうまばらにしか車の停まつてない駐車場に、丸っこくてかわいいシャンパンオレンジの軽自動車。

きつとレイナさんのだろう。

修兄はバイクしか持つてないはずだし。

開けっぱなしのトランク越しに一人が笑つて話してるのが見える。Tシャツに短パン姿の修兄は、相変わらず背が高くがつしりとしていて、

日に焼けないよう、長袖のパーカーを羽織つてホットパンツをはいたレイナさんは、小さくて華奢で。

年齢はレイナさんのほうが一つ上だけど、大人になるにつれて、そういうのはあまり関係なくなるもんだって、

私にもなんとなくわかる。

客観的に見て、一人はとてもお似合いだつた。

慣れた手つきで当然のように運転席のドアを開け、エンジンをかける修兄。

知りたくもない一人の日常が、目の前で繰り広げられていくことに、自分の心が着いていけない。

一緒に来ていた同じサークルの人たちは、一足先に帰つてしまつたらしく。

ただそれだけのことなのに、一人はもう公認なのだと暗に言われているようで、

車へと向かう私の足はいつそう重かつた。

私たちが送つてもらうせいで、誰かが乗れなくなつたりするんじやないかと、遠慮するフリをして、

修兄の申し出を辞退しようと頑張つてみたりもしけど。

何台もの車に分乗してきていたらしくて、全然そんな心配はいらなかつたみたい。

そうだよね、高校生じゃないんだし。

少し先を歩く早川が急に振り返つて、

「お前、寝たふりしてろよ。」

何か企んでいるような、嬉しそうな顔で親指を立てている。どういう意味なんだろうか？

もしかしたら、私がこの状況を快く思つてない」と、気付いてるのかな？

頑張つてフツーにしているつもりなのに、顔に出来ちゃってるのかも。そう思うと、修兄の顔を見てちゃんと話せる自信がなくなつてしまつて、思わず足が止まつてしまつた。

不思議そうな顔した早川が、白い歯を見せてニッと笑うと、「ちゃんと説明すれば大丈夫だつて。誤解なんだから。」

と、また意味不明な発言を繰り返す。

私が歩きだすまで、立ち止まつて待つていてくれるその優しさは嬉しかつたけれど、

理由がわからないから、なんかちょっとコワワイつていうか・・・。そのままその場で考え込みそうになつたけど、そんな時間を『えてはもらえず。

運転席の窓が開いたと思つたら、私たちは修兄に大声で呼ばれた。

「かりんーっ！置いてくぞー！」

自分から誘つたくせに！

いつそ置いて行つてくれたならどんなにいいか。

仕方がないから急ぐフリをしながら、この期に及んで私はまだそんなことを思つていた。

待つてくれた早川の背中にようやく追いつくと、
「俺が海行こいつって言つたから・・・、俺のせいと言えれば俺のせいだし。」

まだボソボソとすまなそうにしつぶやいてくる。

そうだ、そうだよ！

もとはと言えばアンタのせいだよ。

その事実に、言われるまで気づかなかつた私はつとして睨むような視線を送ると、

「お前、ひょっとして、今気づいたのか？」

まだそだなんて言つてもいないので、おかしくてたまらないといふように、顔を背けて笑い出す。

「謝るか笑うかどっちかにしてよなー！先行くよー。あんまり腹が立つから、早足から小走りにスピードをあげるナビ、すぐに追いつかれて。

「100年早いつーの。」

余裕の笑みを浮かべると、私を置き去りにして駆けていく。

「ああっ、もう、どいつもこいつもー。」

やり場のない怒りがふつふつと湧き上がつてくるナビ、この中で一番立ち場が弱い私に、できることは何もない。ささやかな抵抗を見せたりしようのなら、100倍くらいで還つてきそうだし。

確かに早川の言つとおり、私にできるのは、寝たふりくらこかもしれないな・・・。

なんだか悲しくなつてきて、肩を落として車にたどり着くと、黙つてトランクに荷物を積んだ。

もう私以外は車に乗り込んでいて、必然的に運転席の後ろに座ることになる。

運転席には修兄、助手席はもちろんレイナさんで、後部座席には早川と私が並んだ。

第八話・癒えない傷

「んじゃ、帰りますか。」

エアコンが効いた車内は快適で、やつぱり乗せてもらひよかつた
な、なんて、

のんきにくつろこでいたのもつかの間だつた。

「さて、じゃあまず、血口紹介してもらおうか?」

俄然張り切りだす修兄。

「誰から行く?」

ミラー越しに探るような目線を送る修兄と目が合ひつ。

やばい!

来る、絶対来る!

うつむいて固まっている私の隣で、

「はいはい!俺行きます!」

早川が勢いよく立ちあがり、

「ゴツン!」

とものすじに音とともに、頭を押さえシートに沈んだ。

「・・・つてえ。」

「大丈夫?」

レイナさんが心配そうに後ろの座席を覗き込む。

「は、い・・・。」

全然大丈夫そうじゃない返事に、

『子供じゃあるまいし、そんなに張り切るからだよ・・・。』

半分呆れたよう、

「大丈夫?」

今度は私が聞いたら、

「誰のせいだと思つてんだよ、くつそー。」

つて、恨めしそうに小声で言われて。

そう言われてやつとわかつた。

私の代わりにトップバッター引き受けようとしてくれたんだってことが。

やつぱり私が困つてることに、気が付いているんだ。

理由は何も聞かないけど、助けてくれようとしたんだ。

おかげで、なんだか急に心強くなつて、元気が出でてくる私は単純なのかもしれないけど。

ホントに嬉しかつたから、

「はーい！じゃあ、代わりに望月かりん、行きまーす。」

気づいたら勝手に口が動いていて。

「イエーイー！」

狭い車内に思いつきり拍手が響いて始まつた自己紹介タイム。

「えつと、望月かりん、高1です。

部活は特に入つません。

修兄とは家が隣で・・・」

そこまで言い掛けると、

「えーっ！かりんちゃんつて高1なのぉ？

高1つて16歳だよね？

16だつて、修くん！

・・・いいなあ、若いなあ。」

しみじみと言いながらレイナさんがほつぺをふにふにと突いてくる。「てことは、彼も16？

いいなあ。

すつごい焼けてるけど、なんかやつてるの？」

すでに順番なんて何の意味もなくなつていた。

私たちはレイナさんが思いつくまま、いろんなことを質問された。

逆に修兄は予想外におとなしくて不気味なくらいで。

戸惑いながらも、

「はい、サッカー部なんで・・・。」

と受け答えする早川。

「へえ、サッカーかあ。あれってカッコイイけど大変そうだよね。

夏休みも練習あるんでしょ？」

「はい。」

「暑いのにHライねえ。」

「はい。」

「早川くん、だよね？」

「はい。」

「下の名前なんていつの？」

「孝です。」

「孝くんかあ。」

今日は部活休みなんだ？」

「はい。」

「じゃ、悪かつたかな、お邪魔しちゃって。」

「はい。」

「「え？」」

ひたすら頷き続けていた早川がここで初めてフリーーズする。隣で一人のやり取りを見ていた私も。

「練習忙しいとなかなかデートできないでしょ？」

せつかくのお休みだもん。やっぱ一人つきりでいたいと思うよね。顔を見合せて固まる私たちに、わかるわかるって言いたげに、レイナさんはうんうんと一人うなづいている。

「レイナさん。」

修兄がやたらハイテンションなレイナさんを制止しようと田配せると、本人はキヨトンとした顔で、

「なんで？修くんだつてそう思うでしょ？そう言つてたじゃない。全く動じない。」

「いや、だから、もうじゃなくて。」

「えー？だつて付き合つてたらそう思うのがフツーだよ。彼が忙しくて会えないなんて、かわいそうだよ。まだ高校生だよ？」

久々のデートなんだつたら、その時間、大事にしなくちゃ……。」

まるで自分のことみたいに熱くなつてゐるレイナさんの様子が少し気が
になつた。

感情移入しすぎてか、泣きそうになつてゐるよつて見えたから。
しばらく間があつてから、気持ちを切り替えるよつて、溜息を一つ
ついた後、

「なんて、余計な御世話か・・・。」

そう言つて小ちく舌をペロッと出して、自嘲氣味に笑つた顔が切な
くて。

私はその場で否定の言葉を口に出すことができず、それは早川も同
じみたいだった。

修兄は一度レイナさんの方を見ただけで、何も言わずにカーステに
手を伸ばした。

第九話・切ない恋、淡い恋

私の、ところが早川の自己紹介の途中から、車の中の空気がなんだか気まずい。

それは誰も迂闊に口を開けないような、重苦しい雰囲気で。しばらく続いた沈黙を破ったのは、レイナさんで。

「佐伯レイナです。えっと、一応20歳になりました、大学一回生です。よろしく。」

と、申し訳なさそうに笑って、軽く頭を下げたので、

「よろしくお願いします。」

私たちは、一人揃つて頭を下げた。

「ほり、修くんも、」

レイナさんが運転する修兄の腕を肘でついて催促すると、信号で止まつたのを見計らつて、やつと口を開いた。

「新谷修一です。19歳。大学はレイナさんと同じ。学部は経済学部。」

ぶつきらめうに言つと、信号が青に変わり、また運転に集中する。何がいけなかつたのか、ウソみたいにむつつりと口をつぐんでいる修兄と、

流れる景色に田をやるレイナさんの間のビリューな距離感。

小声で早川が、

「おー、俺ら、降りたほうがよくねえ？」

つて聞いてくるけど、実際問題そんなの無理だし。

私だつてできることならこのいたたまれない状況から脱出したいけど、

それ以上に、ぼんやりと窓の外を見ているレイナさんの横顔から田が離せなかつた。

どことなく寂しそうで、『憂いを帯びてこる。』と言えばいいのかな。

さつきまでの楽しそうな様子とはまるで別人のようだ。

「孝くん、うちどのへん？」

いきなり修兄に話しかけられて、早川の肩がビクつとする。

「あ、俺、駅前に自転車停めてるんで、そこで降ろしてもらえますか？」

「了解。」

その会話を聞いてよしやく、私も自分の自転車のことと思つて出した。

「あの、修兄、あたしも！」

「オッケー。」

結局駅に着くまでの間も、着いてからも、修兄は一度も後ろを振り返らなかつた。

「あらがとうございました。」

駅で降ろしてもらつて、丁寧に頭を下げてゐる早川を横田に見ながら、

「あの、・・・気をつけて。」

としか言えない私。

あんな張り詰めた空氣の車内に残つた二人が気になつて、おれどころじやなくて。

修兄からの質問攻めにあつとを覚悟して、送つてもりひといとじたわけだけど、

実際にはそんなこと氣にしていた自分が、馬鹿みたいに思えるほど、修兄は私に関心ないんだつてわかつて。

しつこく責められずにすんだのは、もちろんラッキーだつたと思つてるけど、

そんなことはどうでもいいことだと、やつとわれていふよりで、私にとつては複雑だった。

修兄には、もっと他に気になることがあるんだつてわかるから、余計に複雑・・・。

私たちはレイナさんとだけ挨拶をかわして、一人と別れた。

「修一さん、なんか機嫌悪かったよなあ。」

自転車置き場に向かつて歩きながら、早川は私に同意を求めた。

「そうだね。」

頷きながら私は、その原因がなんとなくだけわかる気がして、修兄がかわいそうに思えた。

レイナさんはきっと、仕事で忙しくて会えなくて別れてしまった彼を、

部活で忙しい早川に重ねてしまつたんだと思つ。

だからあんなふうに、気持ちが昂ぶつてしまつたのだ。

それはたぶん仕方のないこと、誰が悪いわけでもないのだけれど。

「うまくいってないのかな？あの一人。」

ちょっとズレた質問をしてくる早川に、一人の事情を話すかどうか一瞬迷つて、

「さあ、・・・そもそも付き合つてるのかな？」

気づいたら自分の中にある疑問を、そのまま口に出してしまつていた。

「え？違つのか？」

「知らない。」

慌てて否定したら、

「なんでお前まで不機嫌なわけ？」

わけがわからないと、困惑気味な早川を申し訳ないと思いながらも、無理して笑える心境でもなく。

別に私には関係ないことだつて、どうにもできなことだつてわかつてゐるけど、

胸の中に、切ないような、ほろ苦いような気持ちがいっぱいに広がつて、苦しくて。

恋つて楽しいことばかりだと思っていたわけじゃないけど、現実に目の前で見てしまつと、戸惑つてしまつ。

「あーあ、腹減つたなあ！」

突然、わざとらしいほどの大声をあげたと思つたら、早川が自転車のハンドルにがっくりとうなだれていって。

まるでエネルギー切れつて感じ。

あんなにたくさん食べてたのに、もひお腹すいたなんて、
「どんだけ食べたら満足なわけ？」

別に厭味でもなんでもなく、ただ純粹に興味があつて。
だつてあんなにいっぱいお皿ご飯食べて、今晩に一回もカツブラー
メン食べてたし、

私には考えられなくて、素直にそう聞くと、

「うーん、とりあえずコメが食いてえーーー！」

「はあ？」

空向いて大声で吠えた割には、わけのわからない答えに思わず吹き
出してしまつた。

「ふふつ、ちょっと何それ？

御飯だけ食べてビーすんのよ？
変なの一。」

お腹を抱えて笑つてると、

「なんだよ、お前、コメを馬鹿にすんのかー？」
つて怒るから、

「違うよ。馬鹿にしてるのは、コメじゃなくて、」
涙を拭きながら答える私をジロリと睨みつけると、

「帰るぞ！帰つて飯食つやー！」

背中を向けて自転車をこぎ始める。

「ちょっと待つてよー。」

「追いつけるもんなら追いついてみるー。」

イタズラっ子みたいな顔して振り返ると、ぐんぐんスピードをあげ
ていく。

今怒つてたくせに、もう忘れたみたいに無邪気に笑つてゐる。
羨ましいくらい眩しい笑顔に、一瞬クラッときた。

その間にも、どんどん遠ざかる後ろ姿に、

「あのー、私一応女の子なんですけど。」

呟いてみても、無駄なのはわかってるけど。

だつてあの顔は、絶対手加減なんてしてくれない顔だもの。

仕方ない。

なんかすっかり向こうのペースだけど、付き合つてやることにしよう。

もういい加減疲れ果てる体を引きずるように自転車にまたがつて、ひたすらにペダルをこぎ続ける。

せっかくひいていた汗が、また肌を濡らせていくのがわかるけど、風をきつてこいでいる間だけは、それも心地よく感じられた。

いつの間にか、さっきまでの重い気持ちもどこかに吹き飛ばされてしまったようで、

体を動かすことって、単純に気持ちいいなあって思う。

ホント、高校生にもなつて競争なんて子供みたいだけど、ちょっとだけ早川に感謝だな。

目の前にあつたはずのその背中は、はるか遠くに小さく見えていて、信号一つ差を開けられて、どうにも追いつけそうにないけど。

それでもムキになつて追いかけていくと、坂の上で止まつている自転車が見えた。

「はー、俺の勝ちー！」

▽サインする早川は涼しげで、余裕たっぷりながらムカつくくらい。こつちはこんなに汗だくで、息も切れ切れ、言い返すこともできないうのには。

やっぱり運動不足なのかなあ？

呼吸を整えるだけで精いっぱいの私に、

「家、どっち？」

ハンドルに肘をついた姿勢で、早川が聞いた。

声も出せずに指で示すと、

「ヒツから下りだから、大丈夫だろ？先行つて。」

なんだか知らないけど、考えるのも面倒で、言われるままに前へ体を動かした。

後ろからゆっくつと着いてきているのが、気配でわかる。不思議そうに振り返る私に、

「送るから。夏は変なの多いっていうし。」

短く言って、周りの景色へと視線をそらした。照れてるんだ。

だからかな、ヒツちまで恥ずかしくなった。

「ありがと。」

聞こえるか聞こえないかの声で呟いて、逃げるように坂を下る。赤くなつた頬にあたる風が生あたたかくて、火照りがちつとも冷めていかないのがもどかしい。

顔を見られたくなくて、ついついペースが上がつてしまつけど、送つてくれるという相手を、引き離せるはずもなく。私の実力的にいつても無理だしね。

お互い何も話さないまま、家の前までたどり着いてしまつた。

「じゃあ。」

「うん、気をつけてね。」

「おう。」

氣まずいわけじゃないけど、どうしたらいいかわからず、そんな短い会話だけで別れてしまった。

女の子扱いされるのに慣れていない、というか、初めてかもしれない貴重な経験だった。

いろんなことがありすぎて、正直今日の私の心臓は、かなりお疲れだと思う。

いろんな意味で心拍数上がりすぎたもんね。

それでも今日一日を振り返つて、楽しかったと言えるのは、早川のおかげかもしない。

ちゅうと強引だつたけど、ずいぶん救われた氣もあるから、よじと
しよ。

「かりん？起きてるのー？寝ちゃダメよー！」

帰宅してすぐ、シャワーへ直行したまま、いつまでたっても出でこない私を心配して、お母さんが呼ぶ声。

だって家に帰つてきたら、どつと疲れが出たんだもん。

ホントに長い一日だったなあ・・・。

もううつむきとお湯につかってぼーっとしてみたい気分。

どれだけゆつくりお風呂につかっても、取れないこの疲労感は一体どこからくるのか？

ぬるめのお湯でも、さすがにこれだけ入つていると体が熱くなつてぐるぐるで、

このままじや脱水症状おこしちゃいそうだし、仕方ない、あがるとするか。

そういうえばお腹すいたしなあ。

お姉ちゃんにバレたらウルサイから、黙つて借りたワンピースを脱衣カゴの一番底に隠すと、

飲み物だけ持つて、さつさと自分の部屋に戻ろうとコンビングを横切る。

「かりん、ケータイ鳴りっぱなしだつたわよ。」

「はーい。」

お母さんに呼び止められて仕方なく立ち止まり、バッグの中に入れつ放しになつていたケータイを、手さぐりで取り出した。

片手で画面を開くと、未読メールが4通、着信履歴が5回も入つていた。

しかもすべて同じ相手から。

「はあー。」

思わず大きなため息が出た。

はつきりいつて完全に忘れていた存在。

そりいえばもう一人いたんだ、うるさいのが。

この追及をどうやって逃れるか、ある程度作戦を練つてから連絡しないこと。

ペタペタとローションで焼けたお肌をケアしながら、片手で順番にメールを開く。

『あれからどうなった？

男の子には会えたの？

報告待つてるからね（^〇^）／』

『電話したらお邪魔かと思つてメールにしてるんだけど…？

こつちには来てなかつたよね？

一応探したんだけど、見つからなくて…。

『メール読んでないの？

途中経過でもいいから教えてよ…。』

だんだんイラついてるのが手に取るよつにわかるなあ…。

『一体どこ行っちゃつたの？

騙したのは悪かったと思つてるけど（――）』

ヒロ君も心配してるから、メール見たらすぐ電話して！』

うーん、この感じだともしかしてあつちも連絡着いてないのかも。オロオロしてゐる一人が目に浮かんで、私はちょっとといい気味だと思つてしまつた。

だつて、おかげでこつちは大変だつたんだもんね。色んな意味で。電話だとまた長くなりそうだし、どうしようか迷つたんだけど、やつぱり無事は伝えておいたほうがいいだろうと、メールを打つことにした。

たぶん、そんなんじや許してもらえないだらうな…。きつとすぐ電話かかつてくるだらうとは思つんだけど、もしかしたら逃れられるかもしれないし。

希望的観測だなあと我ながら思いながら、当たり障りのない文章を考える。

向こうも謝つてることは非を認めてるわけだし、ひょっと怒つてるフリしちゃおうかな。

『男の子つて早川のことでしょ？』

なんで内緒でそういうことするの！わけわからんないよ、もう。もう絶対あんなことしないでよ！

ちゃんと家帰つてきたから、心配しないで大丈夫だよ。』

思い切つて送信ボタンを押す。

案の定、一分もたたないうちに鳴り出す着信音。

「早っ！」

ベッドの上で震えだすケータイに思わず後ずさる。ことのいきさつをうまく話せる自信がないだけでなく、今自分が何を言い出すかわからない不安もあって。

「はい。」

恐る恐る出ると、

「あーっ、かりんー！

なんで電話してくんないの？

心配してたんだよ、ずつーと！

「あの、えつと、・・・」めん。」

なんで私が謝つてんの？逆でしょ？

「いいけどさつ、で、早川には会えたんでしょ？ねえねえ？」

さつそく本題に入るみか。

待ちきれなくつてうずうずしてるのが声だけでもわかるくらい。

「うん。会つたよ。」

「それで？

「人も後からこいつのプール来た？」

「ううん。」

「だよね、だよね？

ヒロ君と探したけどいなかつたもん。絶対一人どつか行つたと思ってたんだ！

みかの質問に答えながら、私も聞きたいことがあつたことを思い出

して、

「ねえ、そもそもなんで今日早川が来たわけ？」

今度はみかが答える番だ。

「え？ ああ、ヒロ君に頼んだの。

『誰か男の子連れてきて』って。そしたら、

「そしたら？」

「あの一人、中学からの知り合いで、仲いいみたいだつたから、私も、知らない人より知ってる人の方がよかつたし、それで……、

「ふーん。」

「ホントだよ！ 偶然つていうか、あの、ちょっとお休みだつていうし、

かりんとなら、気も使わなくてすむからラクなんじやないかつて、ヒロ君が……。」

最後にはヒロ君のせいにしきゃつて。
かわいそうなヒロ君。

確かにみかのおかげで、今日は決して退屈ではなかつたし、いっぱい刺激を与えてもらつた気はするけど。

そんなこと本人に言つたら、

「でしょでしょ？」

なんてすぐ図に乗りそだだから絶対言わない。

「そんなに怒らなくたつていいじやん。楽しかつたんでしょ？

どこ行つたの？ どこ行つてたの？

ずっとメール返つてこなかつたくらいだもん、楽しかつたんだろ？ なあ・・・。」

勝手に電話の向こうで妄想し始めているみかに、どこまで話したらいいものか。

どうせ早川の方は、ヒロ君にいろいろ聴取されてるんだろう。

（まあ、ヒロ君の場合、させられてると言つた方が正確かもしけないけどね。）

ウソつくと後々ややこしいから、余計なことは言わないよ」と、
聞かれたことにだけ答えればいいか。

「あの、向こうが海に行きたって言つからさ、海に行つてきた。
「えーつー遠いのに、海まで行つたんだ? すごいじゃない。

いいなあ、口マンチックだよねえ。」

なんかさつきから良いように想像しすぎる気をするんだけど。
「で、もちろんこの前買つた水着持つてつたんでしょう? 」

「まあね。」

「あれ、フリルがついてて超カワイイんだよねえ。
かりん色白いからすつごく似合つてたし。

絶対早川、クラつときてたはず。」

「それはないと思う。」

そこは間髪入れずに否定した。

私の頭の中には白い水着姿のレーナさんが浮かんだから。

「私なんかよりキレイな人、いっぱいいたから。」

思い出したら無性に腹が立つてきて、言い方がキツくなってしまつた。

変に思われなかつたかなと心配していると、

「向こうはどうだつた? 私服とか、カツコよかつた? 」

そんなのお構いなしに聞いてくるみかにほつとしながら、
そういえばどんなカツコしてたつけ? って考えてたら、

家の前で別れた時のきこちない自分達が浮かんで、ほっぺがまた熱
くなつて。

顔見えなくてよかつた、危うく突つ込まれるとこだつた。

それでも、なぜか手のひらで自分を扇ぎながら話す。

「まあまあだつたよ。まあ元がそこそこのいいんだし。」

今のところうまくかわせているなと安心して、

うつかりカツコイイと認めていることにも気付かず。

「ふ〜ん。」

含みのあるみかの声が、なんか不気味。

「今まで一緒にいたの？」

「つうん、1時間くらい前に帰ったと思う。

帰つてからシャワー浴びて、しばりへりーっとしてたから。「テーートの余韻に浸つてたとか？」

「違います！疲れただけです！」

あの体育会系に付き合わされた私の身にもなつてよ。

マジで海に沈むかと思つたんだから。」「

「それつてさ、よつほど楽しかつたつてことだよね？ね？」

みかが笑いをこじらえながら何度も確認するよつに聞く。

「うん、まあ、・・・フツーに楽しかつたよ。」「

「ホント？ よかつた！」

頑張つて作戦立てた甲斐があつたよ。

そつか、そつか。うまくいつたんだ。

はしゃいでいるみかに釘を刺すよつに。

「別に何もうまくはいつてないと思つたけど？」

と一応言つておいたけど、全然聞こえてないみたい。

「まあ、お疲れみたいだから、今日はこの辺で許してあげるけど。電話じやイマイチわかんないし、会つて話そつよ、ね。

みんなにはあたしからメールしとくから。」「

「みんなって、ちょっと、みか？」

つて切れてるし・・・。

うらやましい性格してるよねえ、相変わらず。

マイペースというか、自分勝手というか。

言いたいことだけ言つて、聞きたいことだけ聞いて、わざと切りするもんでしょう。

私だつて、聞いてほしいことあつたんだけどなあ。

持て余して整理のつかない感情も、聞いてもらつだけでラクになれたりするもんでしょう。

そもそも半分以上みかの責任だと思うんだけど。

まんまと策略にハマつたなんて、認めるつもつはないけど、

自分の気持ちが大きく動いたことを自覚しないわけにはいかなかつた。

それは早川に対してだけでなく、修兄に対しても。

ただでさえこうこうの慣れてないのに、一度に二人のことなんて、私の頭じゃ考えられそうにない。

もういっぱいいっぱいで、思考回路がショート寸前。

いつもは聞かれたくないことまでしつこく聞くくせに、

こんなときだけあつさり引き下がるなんてズルイよ~。

こっちは珍しく誰かに話聞いてもらいたい心境だといふのに。

ベッドの上で右へ左へ「ロロロロ」転がりながら、時々すがるようにケータイを見つめてみる。

いつかかってきてもいいよ~に、夕飯の時も、ケータイをリビングに持つておりて。

だけどどんなに待つてもその夜は、みかから電話はかかってこなかつた。

第十一話・女の友情

昨夜は結局あんまり眠れなくつて。

寝ぼけ眼でリビングへと降りていくと、出勤前のお母さんがいた。

「珍しいわね、かりんが起きてくるなんじ。

ちゃんと朝ごはん食べなさいよ。」

忙しそうにパタパタとスリッパの音をせせ、

田の前を行つたり来たりするお母さん。

「パンでも食べよつかな～。」

「冷蔵庫にヨーグルトもあるし。

食べたらちやんと丘付けといてね。」

「はい。」

と返事はしたもの、テーブルに肘をついたまま、ぽーっとしてしまつ。

「かりん、今日、修ちやんのとこ行く日でしょ。」

「うわっ。やうだよ、今日つて水曜日だつたんだ！」

今ので一気に田が覚めた。

「冷蔵庫に昨日送つてきたふどりつがあるから、

おすそわけで持つてつてほしいの。

お母さんすぐ忘れちやうから、かりん覚えといてね。

「わかった。」

とは言つたものの、

昨日の今日で顔を合わせるのはなんかちょっと気が重い。

かといつて、行かないのは余計に気まずい気がするし・・・。

なんとかして逃れられないか、方法を考えている私に、

「じゃ、お母さん行つてくるから。

かりんも一日中ダラダラしてちやダメよ。」

「わかつてゐつてー、いついらつしゃい。」

「こつてきます。」

しんとしたリビングに一人でいると、

やつぱり今日も暇な自分を自覚してしまつ。

昨日のことは夢だつたんじやないかと思えるほぢだ。

だけど・・・。

両足の甲には恥ずかしいほどくつきりとビーチサンダルの型が残り、タンクトップから出た肩先を指でさつとなぞると、ピリッとした痛みが走る。

そのどちらもが、全ては現実に起きたことだと訴えてくるよつで。「はあ～。」

起きてから何度ついたかわからぬ溜息。

私が考えたつて仕方無いことなのに、どうしても考えてしまつ。

思つていたよりずっと、レーナさんがいい人だつたからなのかなあ？

いつのまにか、一人を応援したい気持ちが大きくなつて。

いつだつて余裕の修兄の、あんな表情見せられちゃつたら、

仕方ないよね。

ホント、いっぽいいっぽいってカソジで、

感情を隠そつともしないなんて、意外だつた。

私たちは小さい頃からずつと一緒で、兄妹みたいに過ごしてきただから、

修兄のことは大抵のことならわかるつもりでいたんだけど、

・・・違つてた。

それとも、修兄が変わつちゃつたのかな？
今までの自分が変わつてしまつような恋。

そんな恋を私もいつかする日が来るんだらうか・・・。

今の私には想像もつかなくて、なんかちよつと「コワくなつて、

そんな思いを振り切るよう、

サイドボードの充電器からケータイを外して開いた。

驚いたことに、みかだけでなくゆうきやなつちゃんからも、メールが来ていた。

夏休みに入つてからとつもの、ほとんど音沙汰なしだつた一人か

ら！

しかもそのタイトルが、

『おめでとーつ！』とか、

『よかつたね』とか、

読まなくても十分想像つくような、ストレートなタイトルで。

みかつてば、一体他のみんなに何を吹き込んだんだろ・・・？

全然わかりたくないけどわかるから、中身を読むのが恐ろしかった。

で、そのみかからのメールは、

『明日みんなで会おうよ！

かりん家行つていい？

ママお仕事でいないでしょ？』

だつて。

ちやつかりしてると、つたぐ。

まあ、中学からの付き合いだし、ウチの事情は把握してるとんね。すさまじい質問攻めにあうこと覚悟して、

私はOKの返信メールを出すことにした。

こんなくだらないことでも、予定ができたことが嬉しくもあつたし、久々にみんなに会えるのが、素直に楽しみだった。

聞かれたくないうちに、うな聞いてほしううな複雑な気持ちに変わりはないけど、

友達にだつたら、上手く話せるかもしれないし。

いつもはひたすら聞き役に徹してるんだから、たまにはいいよね？

まだ誰にも何も言つていなけれど、約束したというだけで、

少し心が軽くなつた気がした。

第十一話・姉妹ゲンカ

夕方、リビングでドラマの再放送を見ていたはずなのに、たたみかけの洗濯物に埋もれて、いつの間にか寝てしまっていた。なんだかまるで主婦のような一日を実感して、けりょうじやつとする。うた寝したせいで、体がじつとりと汗ばんで気持ちが悪いので、シャワーを浴びようとバスルームへ向かうと、知らないつむに部活から戻っていたお姉ちゃんがちょうど出でてくるところだ。

「かりん、今日家庭教師の日でしょー？」

「そーだよ。」

なにか言いたそうにニヤニヤして、私の顔を見ると、「まあ、昔からあんたは修ちゃんのファンだもんね。私にはどこがいいのか、全つ然、わかんないけど。」

昔からお姉ちゃんは、修兄のことを修ちゃんと呼ぶ。

1つ年下だけだし、お母さんたちがそう呼んでるからだつて言つけど、

私はなんか気に入らない。

床に置いた体脂肪計に足を乗せ、

「でも、修ちゃんは年上が好みだからなあ・・・」

また一人でクスクス笑つて、とにかく感じ悪い。

無視して側を通り過ぎようとすると、

「この前、私、部活の帰りに見ちゃつたんだよねえ。」

含みのある言い回しに、思わず足が止まつた。

ここで立ち止まつたら向こうの思つシボなのに、その続きを聞きたい誘惑には勝てなくて。

「近所のファミレスでなんだけど、修ちゃん、彼女と揉めてたみたいでさ、

すつじにキレイな感じの人で、あれも年上だよ絶対。

その人、泣いてたんだよー。ヒドくない？あれもひダメっぽいよ、絶対。

ワイドショールポーターみたい、嬉しそうに話すお姉ちゃんは、超ヤな感じだつたけど、ウソをついていふよつには見えなくて。

「それつて、いつ・・・、」

言いかけて、自分の言葉にはつとした。

そんなこと聞いたつてどつしおつもないのに、何を言つてこるんだろう、私。

黙り込んでうつむく私を、お姉ちゃんが不思議そうな顔で覗き込んでくる。

「ま、そう落ち込むことないつて。

修ちゃんだけが男じやないんだし。

大体かりんは修ちゃんを美化しすぎなんだよー。

そりや、私もちょっと意外だつたけどさ。

優しいだけが取り柄だと思つてたのに、公衆の面前で女の子泣かしちゃマズイよね。」

お姉ちゃんつて言つたつて、たかだか2年早く産まってきたつてだけなのに、

なんでそこまでHラソーになれるの？

私のことだけならまだしも、修兄のことまで、馬鹿にしたみたいな言い方して。

修兄だつて、何も泣かせようと思つて泣かせたわけじゃないはずなのに、

それをおもしろおかしく話す無神経さが許せなくて、

「何にも知らないくせに、テキトーな」と言わないでー。」

怒りにまかせてバスルームの扉を思いつきり閉めた。

「何よ！バカ！せつかく教えてやつたのにー。」

ガラス越しに叫んでるお姉ちゃんの声をかき消すよつこ、シャワーの蛇口をひねる。

「冷たつー！」

もう、何よ！・・・お姉ちゃんのバカっ！」

なんでこんなにイライラするんだう？

自分でも何に腹が立っているのか、よくわからない。

お姉ちゃんが修兄の悪口言つたから？

彼女つて言葉に、レイナさんの顔が浮かんだから？

それもあるけど・・・、

私、今一瞬、喜んでた。

修兄が彼女と、レイナさんとダメになつたかもしれないって聞いて、ちよつと嬉しいと思つてしまつたんだ。

信じられなかつた。

なんで？

レイナさんは会つて話してみたら、とつてもいい人だつたし、二人がうまくいけばいいなつて、さつきまでホントにそう思つてたはずなのに。

自分がこんなにヤな子だつたなんて、信じられないし信じたくない。自分でもよくわからない自分の気持ちに振り回されて、頭の中はぐちゃぐちゃになつていた。

これつて単なるヤキモチ、なのかなあ・・・？

ただ他の人には獲られたくないだけとか？

好きな芸能人に熱愛が発覚したときのファンの気持ちみたいな？

「ホントは修兄のことが好きなんじゃないの？」

いつかゆうきに言われた言葉が頭に浮かんで、

「そういう『好き』じゃないもん・・・。」

自分にいいわけするみたいに呴いた言葉は、出しつぱなしのシャワーの音にかき消されて、泡と一緒に流れていつた。

一人でいる間にあれこれ考えすぎて、時間になつてもなかなか修兄の家へ行く気になれなかつた。どんな顔して会つたらいいのかわからなくて。さりげなくとか、自然にとか、思えば思つほどできなくなるタイプだし。

だけど今日行つとかないと、この先余計に顔合せづらっこいへりい、

私でもわかるから。

勇気を振り絞つて玄関のインター ホンを押して、

「こんばんは〜。」

それだけなのに、ビリュームに声が上ずつてしまつ。

「おう、開いてるかい。」

いつもと変わらない声が聞こえて、少しほつとした。「おじやまします。」

修兄しかいなけど、一応玄関で挨拶してから、いつも通りに脱いだ靴を揃えてキツチンへ向かう。

お母さんに言っていたお裾わけのふどうをしまおつと、冷蔵庫を開けて、

「修ちゃん彼女と揉めてたみたい……。」

さつきのお姉ちゃんの言葉が、ふいに頭をよぎる。

『それつていつの話だらう……?』

ぼーつと思に出している間中、開けっぱなしになつた冷蔵庫が、ピーッ、ピーッといつう警告音を鳴らして、私を現実へと引き戻す。

「聞かなかつたことにしよ。」

慌てて冷蔵庫のドアを閉めながら、自分に言い聞かせるよつと小さな声で。

二階へ続く階段を上がりながら、

『いつもドーリ、自然に、自然に・・・。』

呪文のように心の中で唱える。

ドアの前に立つと、いつそう高まる緊張。

心を落ち着かせようと、ドアノブをグッと握つて、深く息を吸い込んでから、

ガチャツ。

「え？」

勝手に開いたドアに引っ張られ、グラリと前に倒れていく体。ゴツン。

「いつたあ・・・。」

「大丈夫か？」

聞かれて見上げたら目の前に、修兄の顔があつた。一体何がどうなつてゐるの？

不思議そうに瞬きする私に、修兄も首を傾げてみせる。

「おまえがなかなか上がつてこないからだろー。何やつてたんだ？」半分呆れたような顔して聞かれても・・・、何やつてたんだろ。そんなに長いこと冷蔵庫の前で考え込んでたのかな？私。

修兄が様子見に降りてこようとするくらいだもんね。拳句の果てにドアノブ掴んだまま固まつてた私は、ドアごと引っ張られてよろめいて。

そのまま顔面を思い切り修兄の胸にぶつけてしまつたんだと納得した。

ことのこきをつを理解した途端、

自分が修兄の腕の中に入り込んだままだつたことに気づいて、

「あの、もう大丈夫だから。」

慌ててもがいてみても、どうにも抜け出せない。

「だから？」

知つててわざと聞いてくるこの性格の悪さ。

しかも、背中にまわつた腕の力をどんどん強くしてくるなんて、

『……』で意地が悪いんだろ。

苦しくて息ができなくて、修兄の胸を何度もぐうぐうで叩くナビ、それでも許してくれなくて、

もう私の体全部が、修兄に覆われて隠れてしまつている。

抵抗してもどうせかないつこないんだし、暴れたら余計に遊ばれるだけだし。

どうせすぐ飽きるだらうからつべ、されるがままになつてこないと、修兄は全然動かないし、何にも言わない。それどころか、髪に頬をうずめるように、上半身を傾けてくる。何で？ 何がどうなつてそうなつちゃうわけ？ いへりなんでもやりすぎだよ。

「どーしちやつたの？ あれ、修兄？」

ふざけてるんでしょつて、顔見て言いたくて、体を離そうとするけど、させてくれない。

まるで見られたくなつて言つてているみたいに、顔をあげることさえ許してはくれず。

口には出さないナビ、

『・・・何かあつたの？』

表情もわからない状況の中、何を根拠にそう思つのか、自分でもわからない。

それでも、その手が救いを求めてるような気がして、振りほどくなんてできなくて。

異常な接近状態にドキドキして倒れそなぐらいになんてかな、逃げ出したりする気は起らなかつた。

修兄が話したくないなら、聞かないでいようつて。

ホントは聞きたいことだけなのに、聞けなかつた。

こうこうとき、妙にものわかりいいフリしちゃうトド、ホントは自分でもあんまり好きじやないんだけどな。

第十四話・言いたくない」と

クーラーでよく冷えた部屋の中では、ヒートの温もつは心地よくて。
しばらくしてあげてもいいかなって思えるくらい。

頭の中にはどうかのものともつかない鼓動だけが響いて、ふわふわ
して。

いつのまにか力の抜けた私は、随分長い間そうしていたような・・・。

「おーい、かづりん。」

名前を呼ばれて始めて、体が自由になつてると気がついた。

「あれ?」

「寝てんのかと思つた。」

実はちよつと気持ちよくてほーっとしたなんて言えるわけないし、

そんな自分が恥ずかしくて、慌てて離れると、

「修兄が解放してくれないからでしょ。」

つて、いいわけ気味に抗議したら、

「「めん。」

『え？ 今なんて？』

そんなにあつせい謝られたと、氣持ち悪いんですけど。

目をそらして伏せた横顔が、バツ悪そつ。

やつぱり、何があつたんだ・・・。

やつと、レイナさんのこと、・・・だよね。

探るよつて見つめる私の視線に気づいた修兄は、

「やつぱおナヒヤキナは抱き心地イマイチだなあ。」

顔がついてなきやじつちが前だかわからんねえぞ。」

「ちよ、・・・それじつこう意味？」

「そ、勉強、勉強。」

わざとらじくへ言つてしまふかすと、床に胡座をかいて、

教科書をパラパラめぐり始めた。

仕方ないから私も、一応ノートを広げるたもの、

どうせえても今のは納得いかない。

だつて、今は心臓飛び出るくらい緊張したんだよー。

それなのに、あんな言い方つて！

だいたい離してくれなかつたの修兄の方じやない！

このまま言われつぱなしじや悔しいから、抗議の意味をこめて、

部屋の真ん中に置かれた丸テーブルに、

分厚い参考書をデスンと大きな音を立てて置いた。

ジロリと横目で睨みつける私のたれやかな反撃なんて気にも留めず、

「で？ 昨日のアレ、ビリビリ」と？

「へ？」

すっかりいつもの修兄の口調にもどりつてゐる。

あんまりHラソーに上から目線で聞いてくるから、

呆れるのを通り越してびっくりして。

なんとも間の抜けた返事をしてしまつた。

「約束しただる、ちゃんと話してくれるんじやなかつたつけ？」

「え？ 別に、・・・何もないよー

てこうか、昨日アイツにいろいろ聞いてたじやない。知つてるんだ

からね。」「

私がいない間に早川とパソコン話してたの、知らないことでも思つてるの？

「やつや、四方の言い分聞かないと、不公平だら？」

なんでそんな嬉しそうな顔するかなあ？

なんか心配して揃したってカンジ。

その話はもう終わったと思つて安心したのこー。

さつきの自分の行動は棚に上げて、私だけ追及されるなんて理不足だ！

つてそういうの、無視できなに自分が悔しい。

「なんか取り調べされてるみたいで、・・・ヤな感じ。

別に悪いことしたわけじゃないの」「。

ブツブツ文句言つ私に、じこまでも修兄は威圧的で。

「言こたくなこつてコトアヘ。

「まあ、それもあるナビ。」「

「ナビ？」

ああもう、しつこよつー

修兄つじぱいんなにしつこいタイプだったっけ？

そもそも言こと訳しなきやこけないような関係でもないし。

曖昧な返事でせひとかばぐりかわうとしても、全然上手くこかない。

しつこもいに加減腹が立つてきてい

「私、・・・何でも修兄に話さなきやこけないのかな？

修兄だつて、修兄だつて言つたくないことへりこあるでしょ？

聞かれたくなことあるでしょ？

わつわだつて・・・！」

勢い余つて出でやつた言葉に、しまつたと口に手を当ててみても、

時すでに遅し。

「わつわだつて・・・？」

「あ、いや、えつて・・・、」

咄嗟に「まかす言葉も見つからず、言ことばでこぬと、

「何？」

つて、も一回聞いてくる修兄の口調が強くなる。

「違ひの、あのね・・・さつき、ほら、

修兄ちよつとい・・・変だつたか。

いつもと違つて、いつか、その・・・だから、何かあつたのかな
つて。」

「何かつて?」

これ以上言つていいいものかどうか、迷う暇もなく私は壁際に追い詰
められた。

「あの・・・あのね、お姉ちゃんが見たんだって。

修兄が女の人と一緒にいて、・・・その人、泣いてたつて。

それつて、・・・レイナ、さん、・・・でしょ?」

自分の目で見たわけでもないのに、

本人に向かつてこんなこと聞いたら私は、どうかしてる。

触れてはいけない部分に触れていると自覚してるから、目線が泳い
でしまつ。

修兄の迫力に負けて、思わず白状しちゃつたものの、

怖くてまともに顔が見れなくて。

上田使いにチラシと様子をうかがうと、

意外なことに修兄は怒っていなかつた。

片手を額に当てて何かを考え込んでいる様子で。

その隙にセーツと顔をあげてこくと、

修兄の長い人差し指におでこを思い切りはじかれた。

「こつたーいーーー！」

あまりの痛さに両手でおでこを押さえると、

「あのせあ、・・・・フジーに考へて、俺がお前に恋愛の相談なんて、

ありえないだろ？

したつてなんの参考にもなんないし 。

それとも何？なげさめてくれたりするわけ？

修兄はからかいつぶつて、じとじと顔を近づけてくる。

わらわのイタズラの余韻で、

そんなちゅうとした動きにも過剰に反応するカラダ。

「やだ、ちゅうと、匂ひ行ってー！」

ぐこつと両手で顔を押しおかれて、ぐつてか壁際から脱出した。

「こつて！ 加減しろよなー、つたぐ。」

と首をひねりながらぐつとい

「・・・そんなに聞きたこ？」

「うん。」

「ヤダ、言こたくなー。」

「何それ、ムカつくなー。」

「やつ簡単に教えてたまるかよ。」

「あつれ。じやあもう絶対、聞いてあげないからねー。」

「こもんねー。」

あかんべえまでされて、なんかすつじへ腹立つんですけど。

まるで子供の喧嘩みたいで、言こ返すのもばかりじへつてやめた。

だけど、そんのは修兄の精一杯の強がりなわけで。

「・・・話したつて、じつこもんなねえよ。」

私じゃ何の力にもなれないってわかつてはいても、

最後に独り言のよつに吐き出されたその言葉が、
小さな棘みたいに胸をチクリと刺した。

第十五話・接近2

ようやく訪れたいつもと変わらない光景。

床に敷かれたコットンのラグの上で参考書とにらめっこして、うんうん唸つている私を、

椅子の背もたれを抱いて座る修兄が見下ろしてくる。ふいに視線を上げると、田があつた。

「ん？」

つて目だけで聞いてくるから、

首を振つて、何もない事を伝えた。

これもいつものこと

なのに頬がカツと熱くなるのが触らなくてもわかる。なんで？

さつきから、どうしても集中できない。

田の前に座る修兄が気になつてしまつ。

さつき抱きしめられた後遺症とでも言おうか、修兄が視界に入るだけで、Tシャツ越しに伝わってきた体温とか、全身が包み込まれた感覚とか、

リアルすぎるほど蘇つてきて、何にも考えられなくなつちやつて。さつきから、何度も顔を上げるたびに田があつて、視線を戻すけど、何も頭にはいつて来なかつた。

「進んでる？」

とうとう修兄がそばまで来て、私の右隣に座つた。

進んでるわけないじゃない。知つてゐくせに。

のぞき込まれたノートには、問題だけしか書かれてない。

「全つ然できてないじゃ ないか。」

頭の上に修兄の頭がコシンと寄せられた。

言葉の割には、声が優しい。

「どうした？」

ゾクリ。

耳元で囁くような声に、体が震えた。

言えないよ。修兄のこと考えてたなんて、言えない。

いつの間にか修兄の左手が私の背中の後ろにつかれてる。顔が近すぎるようを感じるのは、気のせい?

「えっと、あの、わかんないトコがあつて。」

「ふうん。それでオレに助けを求めてたのか。」

チラチラ見てたからそう思つた?

そう思つてくれた方が、私としては助かるけど。

「だつたら早く言えばいいのに。で?どこがわかんない?」

私が握りしめてるシャーペンを、修兄のきれいな長い指が抜き取つた。

器用にくるくる回されて、私の質問を待つている。

その様子をぼんやり眺めてる私に、

「かりん?」

どうかしたのかつて、修兄は不思議そうな顔してる。修兄がさつきからいつもとなんか違うから、おかげで私、なんか体が熱くて、胸がドキドキして、金縛りにあつたみたいに動けなくなつて・・・。お願い、これ以上接近しないでー。

ブルブルブルブルブル、ブルブルブルブルブル・・・。バイブになつてる修兄のケータイがテーブルの上でカタカタ揺れている。

助かつたー。

「電話だよ?」

「そうみたいだな。」

「出ないの?」

「どうしようか?」

修兄はズルイ。私にばっかり聞くんだもん。

答えないと、

「じゃ、出ない。」

そつぱつて、まさか電源を切らつとするなんて！

「ちょ、切つちやダメでしょ！」

ケータイを取り上げようとしたら、その手をどんどん高く上げて、取れるもんなら取つてみろつて顔して。

もう、頭に来た！子供じやないんだからね！

「ちょっと、貸しなさいよ！修兄！」

本気出して掴みかかつて、なんとか指先が携帯に触れたと思つたら、

あれ？音が止まつた。

「切れたみたい。」

つて、舌だしてる場合じやないでしょ！が。

脱力して下りしかけた腕を掴まれて、みづやく自分のしてるとんでもない格好に気づき、

血の気が引いていく。

自分の手を修兄の肩にかけ、胡座をかいてる修兄の上にのじ登るよ

うなカツコで、

ケータイしか見えてなかつたとはいえ、これはちよつとマズイでしょ。

（この状況はやばい。）

頭の中で警報が鳴るけど、もうどうしようもない。

右の手首はもう掴まれて、腰には修兄のもう片方の腕が回つてゐる。どうしたつて身動きが取れないのだ。

そのまままるで私が押し倒したかのように、後ろへ倒れて行く修兄が、

スローモーションに見えた。

からうじて残つた左手を床に着き、上半身を支えて、完全密着は免れただけど……。
どうしよう、この格好、馬乗りになつてゐみたいで、かなり恥ずかしい。

フレアのミニスカートからは、腿が半分ほど見えてしまつていて。「いつまで乗つかつてゐつもりだよ？」

怪しい笑みを浮かべてゐるこの人は、何がしたいの？

冷静になろうとしてゐるのに、頭に血が昇つて、うまくいかない。修兄は私の反撃を待つよう、黙つてこっちを見つめてるだけで。なんでこんなことになつてゐるの？

私はいつも通り、数学の勉強見てもらひに來ただけなのに。なんで？ なんで？ つて疑問ばかりが、頭の中でグルグルグルグルまわつて……。

だけど、そんなこと考えたつて、状況はいつこうに変わらない。とにかく何か言わないと……

「は、はなして？」

言い終わると同時に、私の中の天と地がぐるんとひっくり返る。確かに両手は自由になつたけど、間近には修兄の顔があつて、見事に私は組み敷かれていた。

（これじゃさつきよりずつと悪いよ……。）

顔の横に着かれた両手のおかげで、なんとかある程度の距離は取れてるけど。

「ああ、重かつた。」

つて、こんなに近づいてゐるのに、どうして何にもない顔して、笑えるの？
ちゃんと手を放したよって、これでいいでしょって顔してゐる。もう限界だった。

鼻の奥がツーンとして、涙がこみ上げるのがわかる。

修兄なら、何されたって大丈夫だと思ってた。

髪に触れられたり、ふざけて抱き上げられたりしても、

それはそれで嬉しかったし、どうってことない顔して笑っていられたけど、

今回は無理。

今までだつて別に平氣なワケじやなかつた。

心臓飛び出しそうなくらい、ドキドキしてた。

でも、修兄が好きだつたから、

女の子として見てくれてのかなつて、やっぱり嬉しくて。

勝手だね。

妹扱いがイヤだつたくせに、妹以上を求められるのがコワイ。

今まで平氣なフリしてきた私が悪いのかな？

もつと先に進んでも、大丈夫つて思われちゃつた？

どつちにしたつて修兄は、私を好きなワケじやない。

なのに、どうして、こんな・・・？

涙があふれ出すまでに、一つくらい思つてること言いたかつたけど・

・
「ブルブルブルブルブル、」

放りっぱなしになつてたケー タイが、また音をたてた。

「結構、しつこいなあ。」

修兄の視線がケー タイに向いた隙に、手の甲で涙を拭う。

間一髪だ。

「なんだ、メールか。」

そう言つて画面の文字を追う修兄の瞳は、とつても愛おしいものを見つめるように優しくて。

きつとそのメールの相手を思いながら、読んでいるのだろう。

「かりんの言ひとおりだよな。」

「え？」

視線をケー タイの画面から外さないままで、ふつと笑みを浮かべた

修兄が話します。

「レイナさんにも言われたんだ・・・。

かりんだったて年頃の女の子なんだから、BFの一人くらい、いたつて全然フツーだつて。

秘密にしたいことだつてあるつてさ。

そりやあそだよな。

オレ・・・なんか勝手にかりんの保護者、みたいな気になつてたのかもしんない。

オマエ昔っから、

『修兄ちゃん、修兄ちゃん。』つて言つて、

俺の後ろばつか着いてきてたから。

だから、いつまでも子供みたいに思つて、

なんつーかその、ずっとそだつて思いこんでてさ。』

修兄は、懐かしい記憶の中にいる私を見ているのか、あらぬ方向に目をやつている。

「ホント勝手だよな。

他のヤツと、仲良さそうにしてるの見たら・・・ビリにうわけかな気分でさ。

ちよつとイジメくなつたつづーか。

・・・マジゴメン、やりすぎた。』

一度もこちらを見ないでそこまで一気に言うと、修兄は体を起こして、私の両方の手首を掴んで、引き起こしてくれた。

照れくさそうに、ポリポリ頭をかいている。

わたしがただただビックリして、いつのまにか涙も止まつてた。さつきまで自分の身に起こつてたこと、今修兄の口から出た言葉、全てが信じられなくて・・・。

第十七話・告白？

「私は、

私は修兄が好きだよ。昔からずっと、今でも。
だけど・・・

それがどういう好きなのか、自分でもよくわからないの。
私だって、修兄がレイナさんの話する時の顔とか、海で仲よさげに
してるとことか、

イヤだったよ。見たくなかつたよ。

でも、修兄とつて私は妹で、

そこまで言つて、はつとした。

慌てて自分の口を両手で覆う。

いきなり、核心に触れてしまつた。

自分でさえわかつていらないホントの気持つ。

ここまでいうつもりなかつたのに。

私って同じ失敗繰り返すタイプなんだわ、きつと・・・。

「かりん・・・。」

困つたような修兄の顔がぼんやり歪んで見えた。

「『めん。』って言われたくなくて、ぎゅっと目を瞑ると、
飲み込んだ言葉の代わりに、涙がこぼれ落ちていつた。
修兄の言いたいこと、わかつてるから、知つてるから、
だけど今、その声で聞きたくないよ。

ぽんと頭の上に大きな手のひらが置かれて、引き寄せられると、
額が修兄の胸にトンとぶつかつた。

「オレにとつてかりんはさ・・・、
いや、やつぱい。

今日は全面的にオレが悪かつた。

だから、頼むからそんな顔・・・、」

優しく諭す様な低い声が、触れているところから直接響いてくる。

フルフルと首を横に振るしかできない私の頭をよじよじと撫でてくれる掌が暖かくて。

修兄にとつて、私は？・・・何なの？

ちゃんとしたじめ刺してくれないと期待しちゃうじゃない。

もう、泣きやみかけているのになんだか離れがたくて、いつまでも俯いている私に、

「ちょっと待ってる。」

そう言つてウインクして、修兄は部屋を出ていった。

「はあー。」

今まで生きてきた中で一番大きなため息が出た。

腰が抜けたみたいに、へなへなと床に座り込んだまま動けなかつた。掴まれた手首に修兄の手のひらの温もりが感じられて。

「修兄のこと好きだけど。」

確かに自分の声がそう言つてるのに、なんだか他人事みたいで信じられなかつた。

「好きなの？」

今更だけど自分自身に問いかける。

好き、だけど、そういう好きなのかな？

あれじやまるで愛の告白みたいだつたけど、私、修兄のこと、そんなふうに好きなの？

みか達にした言い訳を思い出しながら、自問自答してみる。

付き合いたいなんて思つてないのに誰にも渡したくない。

どうにも説明のつかないこの気持ちは、いったい何なのだろう。

少しだけ開いたドアの向こうから、階段を上がつてくる足音と共に

修兄の話し声が響く。

さつきの電話、かけなおしたのかな？

「・・・わかった。」

そこで待つてて。すぐ行くから。」

修兄の声にはらしくない程余裕が無くて、よくわからないけど胸騒ぎがした。

だけど今は、あたしが聞いちゃいけないとのような気がして、「出かけるんでしょう？いいよ。」

電話が切れたのを見計らつて、声をかけた。

「え？ああ。聞いてたのか？」

「ん、ちょっと聞こえちゃった。

急いでるなら、戸締まりしとくよ。」

引き止めそうになるもう一人の自分に言い聞かせるように、物わかりのいい私。

さつきまで泣いてたことも、何もかもなかつたことみたいに。

「そつか、んじゃ頼む。鍵、いつもんとこな。」

「了解。」

私の返事を最後まで聞かずに部屋から飛び出した修兄は、ヘルメットを抱えると、ものすごい勢いで階段を駆け下りていった。玄関のドアを乱暴に閉める音に、バイクのエンジン音が続いて聞こえる。

ただそれだけのことなのに、一分一秒でも速く彼女の元へ辿り着きたい気持ちが伝わってくる。

「レイナさん、だよね・・・。」

そんなの鈍感な私でもわかるよ。

焦つて出ていつた修兄の様子が、なんだか気にかかるけど・・・。やつぱり一人は付き合つているんだ・・・。

修兄、全然そんなこと言つてなかつたのに。

まあ、私に報告する義務なんてないんだし、仕方ないよね。

仕方ないのに、裏切られたような気持ちがして、ショックを受けている私。

ほんの一瞬だけでも、自分の方を向いてくれたように思えた修兄の気持ちは、

やはりレイナさんへ向かっているのだと思い知らされたようで。何も期待していなかつたつさつきまでの私なら、こんなに落ち込まなかつたかもしれないのに。

修兄のそういう優しさ、実はすごく残酷なことなんだって、わかってる？

抱えこんだ膝の間に思わず顔を埋めそうになるけど、いつまでもこの部屋に一人でいると、泣いてしまいそうで。何とか気力を振り絞つて立ち上がると、修兄の机の引き出しからスペアキーを取り出す。

何度も家の戸締まりを確認して、鍵をポストに落とすと、静かに門を閉めた。

「あれ？・・・望月？」

呼ばれて振り向くと、そこには早川が立っていた。

「ど、どしたの？」

滲んだ涙を慌てて手の甲で拭う。

誰にも会いたくなかったのに、なんでよりによつて？
でも、考えようによつては、ちょいどよかつた？

早川には悪いけど、このまま部屋に戻つて、一人でいるのは寂しきるから。

暗くてすぐには気づかなかつたけど、よく見ると街灯の下にいつも
の自転車が停めてある。

「夏休みの宿題、英語もつ終わつたって言つてたる？」

・・・今のうちに貸してもらえないかと思つてさ。
ギリギリだとオマエの友達も当てにしてんだろ？」

「うん、まあ、いいけど・・・。」

なるほどね。

帰りの車でやたら人の宿題の進み具合、細かく聞いてくると思つたら、そういうことか。

それにしても・・・、昨日会つたばかりなのに、あれから随分時間が経つた気がする。

早川に会うの、すつじく久しぶりみたいに感じる。

「すぐ返してくれる？次、予約入つてるから。」

「了解。」

「・・・にしても、そんなに英語ダメなの？」

「ダメなんじやない。キレイなんだつて！」

そういうのへりクツつていうと思うんだけど？

でも本人はいたつて真面目な顔で言つてるから、
そんなものかとなんだか納得させられて。

「じゃよろしく。」

つて今すぐ持つて来いつてこと？

意外と自分勝手じゃないの、コイツ。

「いや、オレ部活終わって、飯食つてから来たから遅くなつて……。

ただでさえ遅い時間なのに、外で長話とかしてたらマズイだろ？ 親とかさ、「いるさくない？」

ちょっとムツとしたのがわかつたのか、慌てて言い訳する姿がなんだからわいい。

そういうえばシャワー浴びたばかりなのかな、まだ乾ききらない前髪に少し癖が出ていて。

昨日一人で海にいた時間に、一瞬引き戻されて、ドキッとした。それをさとりれないように、慌てて別の話題を探そうとして、「スゴイね。1回来ただけなのに、道わかつたの？ どうやって覚えたの？」

やたら早口になつちやつて、ちょっと大げさに聞こえたかもしれないけど。

方向音痴な私としては、それだけでホントに感心してしまった。なのに、

「別に。」

なんて、簡単に言つてくれちやつて。

だけど、わざわざ家まで来てくれて、それはそれで嬉しかつたりして……。

「じゃあ、……ちよつと待つてくれる？」

「わりい。」

キイと音を立てる我が家の門をそつと開けると、玄関からそのまま二階へと、

誰にも会わなによつて忍び足で階段を上がる。

会つちやつたら会つちやつたで、それは別にいいんだけど、できることなら会わずにすませたいっていうか……。

「はー、どうだ。」

「サンキュー。」

人の苦労も知らないで、パラパラとノートをめくりながら、
「やっぱお前んち、ここだよな？」
つて顔もあげようとしないで。

「え？ そうだよ。」

何言つてるのいまさら。だから君は今ここにいるんでしょ？

でもなあんか、トゲある感じ？

不思議に思つて、もう一度早川を見ると、

その視線は「新谷」とローマ字表記された表札を捉えていて。

「ああ、あの、私、修兄に家庭教師してもらつてるんだ。

向こうは一応現役大学生だし、私、理系全然ダメだから。」

何を焦つてるんだか、自分の言葉が変に言い訳つぽく聞こえるのはなぜだらう？

でも、どこがどうだからそつ聞こえるのかわからないから、修正のしようもなくて・・・。

「理系つて数学？物理？それとも・・・」

「全般。」

「ははっ、そうなんだ。」

「笑わなくたつていいじゃない。」

「ごめん。バカにしてるんじゃなくて、意外だなと思つて。

望月にそんなに苦手な教科あるなんてさ。

全然そんなふうに見えなかつたし。

もしかしてオレの方が点数良かつたりして？

「さあね。」

小さく舌を出して、その質問の答えは誤魔化した。

負けてるの知つてるから、言いたくないんだよね。

「そんな完璧じやなくていいんじゃね？それくらいのがカワイいくていいつて。」

「は？」

「だから、ちょっとくらじダメなトコある方が、女の子はカワイイって言つてんの。」

「それって、守ってあげたくなるってヤツ?」
「そうそう。わかってんじやん。」

「言われたことないけどね。」

「ああ、どうして私って、こんなカワイイくない返事しかできないんだろ。」

だいたい何で恥ずかしげもなく、カワイイとか言えちゃうのかな、この人は。

私の方が赤面してしまうよ。

自意識過剰かもしれないけど、一緒に海に行つてから、早川の事、意識せずにほいられなかつた。

つこわづきまで、頭の中は修兄のことでこいつぱいだったのに、自分で呆れてしまつ。

『いい加減? なのかな、アタシつて・・・。』

第十九話・涙の理由

「今度から、わからなかつたら聞けよな。せつかく隣に座つてんだから。

「そうなりやこいつちも心おきなく英語のノート借りれるし?」

「そういう魂胆ね、はいはい。」

一人で顔を見合させ、フフッと笑う。

こんな時間に学校以外の場所で、フツーに話していることが不思議で。

ちょつとワクワクして、どにかくすぐったいよつな気持ち。

「とにかく、それちゃんと返してよー。」

「わかつてゐよ。終わつたらすぐ返すつて。」

1学期の間は、毎日学校で顔を合わせていたけど、

夏休みが始まつてからば、昨日まで一度も会つてなかつた。

だけどそんなのは当たり前のことだし、他のクラスメートとだつてそう。

でも、昨日会つて、今日会つて、気がついた。

『学校がお休みの間は、ちゃんと約束しないと会えないんだ・・・。

』

登校日までまだ2週間以上もある。

隣で伸びをしながら、夜空を見上げている彼は今、何を考えているのだろう。

ふいにこっちを向かれて、横顔を見じつと見つめていた自分に気づき、急に恥ずかしくなる。

「後つかえてるんだからね。」

つて念押ししながら、

『ああ、そうだ。返しに来てくれば、そしたらまた会えるんだ。早く会いたいから、そう言つたわけでは決してないんだけど。

「オッケー！」

弾けるように笑つてそう言つてくれたから、
ホントに約束守ってくれそうな気がして、
期待してしまう。

「気をつけてね。」

ようやく帰る気になれた私の口から、素直にそんな言葉が出てきた。
街灯に照らされた銀色の自転車へと、彼の背中は無言のまま歩き出す。

ふいに立ち止まり、何か言いたそうに私をじっと見て、

『どうしたんだろ?』

首を傾げる私から視線を逸らした横顔が、ためらつてるのがわかつた。

「さつきさあ、・・・もしかして、泣いてた?」

『うつ、気づかれてたか・・・。』

それでもフツーそういうこと聞くかな?

せっかく忘れかけてたのに、

そこは見て見ぬ振りすべきトコなんじやないの?』

本人も多少気を使ってか、全然こっちを見てこない。

「さつき、修一さん出て行くの見たんだ。

なんかすっげえ急いでたみたいだつたけど、・・・なんかあつた?』

答えられずに俯く私に、

「ゴメン! 今のナシ、やっぱ帰るわ。」

挾むように顔の前で両手を合わせて謝る。

『そんなことするくらいなら最初から聞かなきやいいのに。』

「レイナさんから電話あつたみたいでさ、

修兄つてば、すつごい勢いで出でつたよ。

なにもあんなに急がなくつてもさ・・・。』

せめて笑い話にしてしまえたらと、終わりかけた話をあえて蒸し返す私。

できるだけフツーに、なんてことない顔して話しているつもりなん
だけど・・・、

どうなんだろ？

早川の言いたいことが、わからないわけじゃない。

ただ、何が悲しくて泣いていたのか、自分でもはつきりしないのこ、

腫物に触るようこそされても困るから・・・。

彼は触れない方がいい話題に触れてしまつたことを、

後悔しているような顔をして。

何て言つたらいいのか、かける言葉が見つからないって顔してるけ

ど。

第一十話・ファイト

「うーん。相手があの人じゃなあ……。

そりや、フラーても仕方ないって。」

ずいぶん考え込んでたクセに、ようやく出てきたセリフがそれなわけ？

どういう結論を導き出したら、そういう言葉が出てくるの？

あまりにもストレートすぎて、怒りより驚きが先に来る。

つていうか、別に私フラーしてないと思うんだけど。

だって、付き合いたいとかそういう好きじやないんだし。

ていうか、早川、私が修兄のこと好きだと思ってたの？

どんどん浮かんでくる疑問符の渦の中から私を引き戻すよ、
早川が追い打ちをかけてくる。

「あれ？ 違つたか？」

自分がヒドイこと言つてるつて自覚あるのかな……、コイツ。

「違う！ 私は別につ、別にフラーしてなんかない……」

ムキになつて言い返しながら、こみあげてくる熱い何かに邪魔され
て、

それ以上は声にならなかつた。

向こうはそんな私の様子を肯定と受け取つたらしく、とも満足げに

「やつぱフラーしたんじやん。」

「うるさい！ 何回も言わない！ …」

もう恥ずかしいのか情けないのか、自分でもわからなかつた。

あんまり腹が立つて、ことのいきさつを説明する氣にもならない。

怒りにまかせて思わず振り上げた手を、
下ろせずにギュッと握りしめていると、

「よし、こいー。」

つて両手を合わせてパンと叩くと、キョトンとしてる私の方に掌を

向けて、

かかつてこいと人差し指の先をくいくいと曲げる。

さつきとはまるで別人みたいなキラキラした目で、腰を落として身構える。

正直、突然そんなこと言われても、はあ？って感じなんだけど、何とも体育会系なその発想が笑えてしまって、

ついついその気になってしまった。

一応ボクシングぽく左右交互にパンチを繰り出しながらも、「こ、こんな感じ？」

あんまりこんなのがやつたことないから不安で聞かずにはいられず、そつと彼をチラ見すると、見たこと無いような、

優しい、労るような視線を向けられて。

「全然ダメ。腰が入ってない、腰が。」

そんなキツイ言葉もわざとにしか思えない。

「ちょっとは運動しろよ。体力ないヤツは遊んでやんねえぞ！」

それって一体どんな遊びよ？

想像したら恐ろしくなって、苦笑いを返すしかなかつた。

やなことは、体動かして、汗かいて忘れるつてことなのかな？

だんだんリズムに乗つてきて、ちょっとはコツがつかめてきたのか、

パンチのたびにパシッ、パシッといい音がする。

「いつて、ちょっと、お前、だんだん強くなつてない、か、つておい！」

「こ、こ、って、言つたの、そつち、でしょーが！」

もう息も切れ切れで、ホントは限界だつたんだけど、ついつい強がつちゃつて。

最後に一発、スゴイのお見舞いしてやろうとして、思い切り腕を引く。

なのに、その渾身の一撃は、

拳ごと早川の手のひらでがしつと掴まれてしまった。

「そ、そ、うは、い、く、か、つ、て、の。」

得意げにしてる早川のおつきな手から逃れようと、

どんなに引っ張っても抜けなくて、

もう片方の手で、指を一本ずつはがそつとするけどそれもダメ。

「参ったか！」

「うー。」

「参った？」

「参らない！」

結局自分が勝ちたがるんだから、いい性格してるよね。

体育会系ってみんなこうなのかな？

いつまでたつても解放されない自分の右手をまじまじと見つめ、やつぱり男の子なんだなあって、力の差を感じてしまう・・・。すっかりおとなしくなった私に、

「降参？」

なんてわかりきったこと聞いてくる。

悔しいから絶対言いたくないけど、いつまで許してくれないんだろう。

「・・・降参。」

「よしよし。」

早川は一人満足げにうなずき、ようやく私の拳は自由になった。

第一十一話・知らなかつた気持ち

停めた自転車にゅっくり歩み寄り、

「じゃあな、これサンキュー。」

振り向きざまに敬礼のような仕草をして見せる。

「うん。おやすみ。」

サドルに跨つて、少し高くなつた彼を見上げる私の頭に、男の子らしさの太い指が伸びてくる。

またデコピン？と思わず目をつむつて身構えていたけどいつまでたつても、なんの痛みも衝撃もない。

そつと目を開けると、その手はふわりと髪の上を滑つていつた。まるで壊れ物を扱うように、ゅっくりと、纖細に。

「なんちゅー顔してんだ。帰れないだろ？」

「へ？」

なんて間の抜けた返事してたんだらう。だって、言われてる言葉の意味がわからない。

「大丈夫か？」

覗き込むように顔を傾ける早川の、心配そうな声が胸に染みて、染みすぎてまた泣きそうになつてたら、

「ほらあ、その顔！」

つて、ああ、そういう意味か。

そんなの私に言われたつて、そつちが優しいこと言つからなに。

そういう無意識に出る優しさが、私の中で修兄と重なる。

そのせいで余計に泣きそうになる今の私を、早川にわかれつていう方が無理だよね・・・。

「ま、そう落ち込むなよ。俺でよかつたらいつでも殴られてやる。」

「何それ？人を凶暴女みたいに！」

「違うのか？」

もつフリレたつてことになつてゐるも、いにやつて感じで、わざわざ否定する氣にもなりず。

いつまでも終わらさうになつてゐる掛け合ひを、無理やり終わらせようといつた。

「おやすみ！」

不機嫌そうに言つ私を見て、早川はなぜか嬉しそうに笑つてゐる。

「おやすみ。」

つて、前を向いたまま手を振るその背中は、あつといつまに暗闇に吸い込まれて見えなくなつた。あまりにあつけないバイバイに、『まるで夢の中の出来事みたい・・・』

そんな不思議な氣分に浸つてゐる、

「かりん？表にいるの？」

玄関の灯りがついて、お母さんの声がする。

「はーい！」

重ね着したタンクトップから出た腕を庇つよつに抱きしめながら、玄関へと歩き出す。

『さつや、この腕』と全部抱きしめられてたんだ。

せつかく忘れてたのに、また思い出しちまつて、顔が火照つてくれる。

修兄のおかげで、といつか修兄のせいで、私にも『人恋しい』つて言葉の意味が、

何となくだけどわかつたような氣がした。

今までには、なんか都合いし言葉だなつて、『寂しい』と同じじやないの？つて、

ただそれだけだつたけど。

キスさえしたことない私がこんな事に氣づく事自体あり得ないと、自分で思つ。

みんなが色々えつちな話とかしてゐるの聞いても、正直理解できなかつたし。

別れようと思つてゐる相手と並ぶあるエントリヤ「つとが、

彼氏がいないと元彼に会いたくなっちゃうとか、そういうの、どっちかっていうと軽蔑してたかも。

でもね、話聞いてもううだけでも、それだけでも、相手が異性の方がいいと思うときってあるんだなって、さつき、早川を見送りながら、そう思つてしまつた私がいた。泣きそうな私の頭の上のせられた手のひらに、心からほつとしたから。

他の誰かに思いを残しているのに、修兄を呼び出すレイナさんを許せない自分がいるのに、

修兄のこと気にしながら、早川の優しさに慰められてる。

結局私のしていることは、レイナさんと変わらないのかもしれない。もちろん、自分を好きって言つてくれる人の気持ちを利用するようなことは、

許せないと思うし、私は絶対しない！今までならそう言つられた人の気持ちって、理屈だけじゃ割り切れないこともあるってよく言うけど、

こういうことなんだろうか？

『そんなこと、疑問にさえ感じたことなかつたのに』って、軽い自己嫌悪に陥りながら。

『さつき修兄の腕が私を抱きしめたのは、きっとそれだけ苦しい恋をしている証拠なのかもしれない。』

そんなふうに思える自分がいるなんて、自分でも知らなかつたこと。心はあんなにレイナさんを追いかけているのに、私に触れた修兄を許せてしまう。

あの時の修兄は、私に何を求めていたんだろう？

たとえ相手が好きな人じやなくとも、誰かの温もりを求めてしまつ瞬間つて誰にでもあるんだろうか？

せめて、その『誰か』は誰でもいいわけじやないと思つたかった。心を許している人？

一緒にいて安らぐ人？

そういうことしても怒らない人？

修兄にとつて私はどれにあてはまるのかな・・・？

私にとって、早川はどれにあてはまる？

リビングに顔を出さずに、自分の部屋に上がりてしまった私に、

「かりんーお風呂入んなさいよー」

階段の下からお母さんの声がする。

「はい！」

とりあえず返事はしたものの、もつかよつと落ち着いてからじやないといと、

お母さんの顔まともに見れやうにないよ。

枕に顔を突つ伏して、出でくるのはため息ばかりだった。

「はい。」

ケータイの画面を見つめ、

「明日、だよね・・・。」

『そりだよ、明日、みか達来るんだ。』

もういろんなことがありすぎて、何を話したらいいのかわからない。自分がどうしたいのかも、どうまで話していくのかも。

わからないことだけで、ぐちゃぐちゃの頭の中。

そのままタオルケットにくるまって、うとうとしながら、

「あ、冷蔵庫にブドウ入ってるの、修兄に言つたの忘れた・・・。」

『メールしどけばわかるよね?』

寝ぼけながらケータイを開くと、青い光が眩しくて思わず目をそらす。

『まだ一人、一緒のかな・・・?』

そう思つと、ケータイを鳴らすのも気が引けて、

そのままパタンとたたみ、目を閉じた。

朝方、ようやく眠りにつきかけた私は、夢の中で、修兄のバイクのエンジン音を聞いたよつた気がした。

『帰ってきたんだ・・・。』

そう思つとなぜかほりとして、そこからお母さんに起されたままで、

一度も目覚めることはなかつた。

おかげで次の朝は、大急ぎでシャワーを浴びる羽目になり、私のあまりの慌てぶりを見て、お母さんは呆れていた。低血圧の私には少々キツイけど、自分のせいだから仕方ない。今日は朝から私のために、みんなが我が家に来てくれるこことなつていてる。

午後からはそれぞれ予定があるらしい、彼女たちは私と違つて忙しい身なのだ。

「おじやまします……」

私しかいなつて知つてるくせに、わざとらしく三人で声を揃えて。

「はいはい、どうぞー。」

笑いながら、あしらつように答える私の手に、

コンビニ袋いつぱいのお菓子が渡された。

一応氣を使ってくれたのか、ただ自分たちが食べたかつただけなんか。

どつちもつていうのが正解か。

玄関のカギをかけ、最後にリビングに入ると、もう各自自分の家のようにリラックスして思い思いの場所へ腰をのろしていた。

ソファに座つたり、床に座つたり。

ガラステーブルの上にお土産のお菓子を山積みにしてから、冷蔵庫に飲み物を取りに行きかけた私の手首を、みかがグッと掴んだ。

「あー、もう、そんなのいいから!

かりんが座らなきや、話始まんないじゃん!!」

「そーだよ。あたしら勝手にやるから、氣い使わないで。」

ゆづきの言葉に、なつちゃんもつんうんうなづいている。

「はあ・・・。」

確かに、こつも途中からセルフサービスで、

みんなしてヒトたちの冷蔵庫好きだけ開けてくれちゃつたけど。
。。。

最初くらいはちゃんとしようと思つたのにせ。。。
「にしても、知らなかつたなあ。かりんが早川と一緒に一人で海行く仲だ
なんて、

ねえ？

いきなり本題に入られて、心の準備ができてなかつたせいか、
まるで私が隠し事でもしてゐみたいな言い方に、ムツとある自分を
隠せない。

日頃から早川のファンだつて言つてるから、わからないうけじゃな
いけど、

自分はちやんと彼氏いるくせに、おかしくない？

「だよねえ。いつのまにそんなに仲良くなつてたわけ？」

ゆうきの意見にそのまま同調するなつちやんに、

「違うよ。それはみか達がやつ、」

慌てて説明しようとするけど、

「私はプールに行こうって誘つただけだよ！」

海なんて、そつちが勝手に行つたんでしょー？」

冷蔵庫を開けながら、すかさずみかが反撃してくる。

「それはつ、早川が行きたいって強引に。。。。」

「イヤなら行かなきやいいじゃん、ねーつ。」

「「ねーつ。」」

あーあー、すっかり一致団結しちやつて。

「そんなのつ、断れる雰囲気じやなかつたんだつて。」

なんて、私の必死の弁明も、

「ふーん。」

「ま、そういうことにしどく？」

「だね。じゃないと話先に進まないし。
つて、まともに取り合つてくれない。」

どうせ私の言い分なんて、最後まで聞いてもらえない以上に、軽く流

されるだけ。

3対1じゃ、完全に不利だ。

私がこれから話すこととも、ちやんと言葉じおつに受け取つてもうえ
るのかどうか、

この分じゃ怪しいな。

なんかいろいろ勝手な妄想入れられそうで・・・。

とりあえず早川と海に行つて、偶然会つた修兄に送つてもうつたと
ここまでを、

かいつまんで話すこととした。

もちろん、都合の悪いところは省略して。

ウソついてるわけじやないから、問題ないよね?

私が話をしている間にも、スナック菓子の袋が次々と開けられていく。

みんなして黙々と食べ続け、ガサゴソ、バリバリ、はつきつ言つてうるさい。

『 ちょっと、みんなちゃんと話聞いてる?』
つて疑いの眼を向ける私に気づいたなつむちゃんは、口の中こぼぽいにしたままで、

「 大変だつたんだねえ、かりん。」

なんて、慌ててフォローを入れてくる。
残る二人も、

「 海なんか行つたばつかりに・・・ねえ。」

「 偶然つてあるんだねえ。すゞーい。」

ジューースで口の中のものを流し込みつつ、相槌をうつ。

「 私もビックリした。」

あんなこと実際に起つるなんてね。

「 でも、直接見ちゃうつてのはキツイかも。」

「 うんうん。凹むよねえ。」

「 やつぱぱショックだつた?」

「 ショックつていうか、やつぱりつていうか・・・、複雑な感じ。」

返事をしながら、そのシーンを思い浮かべて。

「 でも、おかげで自分の気持ち、ちやんと自覚できたんじゃない?」

「 うーん・・・。」

相変わらずみかは容赦なくつづりこんでくるなあ。

「 私だつたら絶対耐えらんないな!意地でも電車で帰つてくるね。かりん、よく車なんか乗つたよね。」

興奮気味に話すみかの言葉に、そういうわれればそつだなど、今さら思つたり。

「ダイジョブだったの？」

心配そうに私の顔を覗き込むなつちゃんに笑い掛け、「うーん、なんとかフツーにしてたつもりだけど・・・。」はつきりしない返事しかできない。

だつてもう言つちやつたわけだし。

バレてようが何しようがカンケーないんだもの。

「泣かなかつただけでもエライよね。よく頑張つた！」

「泣かないよ、さすがに！」

・・・けど、早川にだいぶ救われたつてのもあるかも。バ力話してるだけですいぶん気が紛れだし。」

一瞬、別れ際の早川の顔が浮かんで、焦つた。

顔が赤くなつてないか、バレないようになつに頬に触れてみる。よかつた、そんなに熱くない。

「ふーん。・・・それつて、早川気づいてたんじゃないの？」

何か含みのある言い方するみか。

「何が？」

「だから、かりんが修兄を好きつてことだぞ。」「えー？」

あんまり早川の話をすると、余計なこと言つちやいそうだから、早く終わらせたいんだけどな。

泣いてるところ見られた上に、慰めてもうつたなんてバレたらー想像するだけで、ぞつとする。

「気づいてないと思つたけどな・・・。」

自分で言つても、しらじらしになと思いつつ。

みんなの視線が痛くて、じまかすように冷蔵庫へ向かつた。

「いや、その場にいたら、たぶん誰でもわかると思う。かりん、わかりやすいから。」

「気づいてないフリしてくれてるんじゃない？」

「早川優しいからな。」

「まあ、優しいとは思うけど・・・。」

そこはなぜか素直に認めてしまった。

「で、ウチまで送つてもらつたんだ。」

「うん。」

「いいなー。私も送つてほしーーー！」

ゆうれい、どんだけ早川ファンへつてへりこ、こいつこが反応してくる
から、

「つぬせこよ。」

みかに一喝されて、

「あーーー。」

ちょっとびりだけど、おとなしくなつてくれて、
ホッとしてる私。

第一一十四話・自爆

「昨日カテキヨの口だつたんでしょう？」

「うん。」

即座に話を軌道修正していくみか。

やっぱ、手ごわいなあ。

「ちゃんと行つたんだー！スゴイ、根性あるー！かりん。」

それに比べると、ゆうきの反応は、いつもわかりやすくていい。

「そんな大げさなもんじゃないよ。

行かないと、次、もつと行きづらくなるから……。

「まあ、それは確かにそうかも。」

「思いきつて行つてよかつたと思つてゐる。

行つて正解だつた。」

自分に言い聞かせるように繰り返す。

「修兄、何て言つてた？」

「何が？」

キヨトンとして聞き返す私に、

ゆうきはいらだちを隠せない様子で。

「何つて、決まつてるでしょ。

レイナとかいう人とどうなつてんのか聞かなかつたの？
付き合つてゐるのか、ただのサークルの先輩なのか、

聞いたんでしょ、もちろん！」

みんなが一気に身を乗り出してくる。

「そんなの聞けないよ。」

「そつと呴くと、

「聞きたくないだけでしょ！」

決定的なこと言われるの「ワイから。」

ゆうきにバカにしたように言られてムツとして。

「それどころじゃなかつたんだって。

こつちがなんか誤解されてて、いろいろ聞かれて、それでもういつぱいいつぱいになつて……。
頑張つて言い返してみるけど、言ひちゃいけないことだらけなんだもん。

自分で言つても、説得力ないのがわかる。

さつきから隠さなきやいけない方にばつかり神経が集中して、一体何のためにみんなに来てもらつたんだろ。

「はつきりフラレた方が、次行けるからいいのに。」

「え、もうフラレてるでしょ。」

「それにしては元気じゃない?」

間違いではないにしても、あまりの言われよう、元気で悪い?

言つときますけど、私、別にフラレでないから。

みんなしてフラレたフラレたつて、いい加減失礼だつての!-

昨日だつて、早川に散々つ、「

思わず出した自分の大声にはつとして、体中の血の気がサーッと引いて行くのを感じた。

誰も何も言わないから、余計に変な汗が止まらない。

「昨日?」

なつちゃんが何の悪気もなく、不思議そうに首を傾げる。

「かりんちゃん。確か海行つたのつて、おとついだよねえ?」

「あの、えと、だから・・・、」

「あのねえ、かりんは、私とかゆうつきとは違つて、隠し事とかできるタイプじゃないんだからね!」

どうせバレるんだから、最初から正直に言つた方がいいって。」
諭すようにみかが迫つてくる。

「バカだねえ。余計なこと言つからバレるんだつて。」

ゆうきは床の上で笑い転げてるし。

「慣れないことするから・・・。」

なつちゃんにまで言わると、余計トホホな気分になる。

「別に隠してたわけじゃ、……関係ないから言わなかつただけだよ。」

「ふーん。で？ 昨日がどうしたの？」

もう誰もお菓子に手を出そとはしなかつた。

三人とも私をじっと見つめて、話しだすのを待つてているのだ。

「ノートをね、英語のノート、借りにきて……。」

「……借りに来て？」

こんな時だけ息ピッタリだし。

「・・・帰つた。」

「はあ？ それで終わりー？」

「往生際悪いー。」

「もう全部吐いちゃいなつて！ ラクなんなるよー。」

刑事みたいなセリフ言って、ほくそ笑んでるみんなの顔がコワイ。

「言つわよ！ 言えばいいんでしょ、言えば。

昨日ノート借りにきた早川にも、みんなと同じようなこと言われたの！

人のことフラしてかわいそうな人みたいに・・・。

レイナさんが相手じや、勝ち目ないみたいに言われてさ。 「

自分で言いながら、何もかもが情けなくなつてくる。

改めて口に出してみて、目の前に突きつけられる現実。

目をつむつてみたところで、何も変わらないのだ。

「ま、認めたくない気持ちはわかるけど

フラレることは恥ずかしいことじやないんだからね。

お子ちゃまなかりんには、いい経験つて氣もするし。」

慰めてくれてるんだが、よくわからないみかの言葉に、力なく頷く。

「男田線だから、余計説得力あるよねえ。」

「ある意味トドメかも。」

次々に地雷を踏んでくれる一人の言葉に打ちのめされながら、

今さらだけど、『失恋』つて言葉が頭に浮かんだ。

第一一十五話・忘れ物

早川のことをじつじつと聞いてくるゆづきをなんとかかわしつつ、話題はみんなの近況や、宿題の進行具合へと移っていく。

「元気出して。」

「またメールするね。」

なんて、よくあるセリフでお開きとなつた。急に静まり返つた家の中が落ち着かなくて、電源を入れたTVに映し出された天気図。

もちろん、予報は今日も明日も『晴れ』、おまけに今夜も熱帯夜だつて。

わかつてはいたけど、やつぱりそうなんだつて思つて、余計に堪える。

TV画面を眺めつつ、飲み残されたペットボトルのふたを閉めていると、

「ピンポーン。」

ふいにインターフォンが鳴つた。

「はい！」

誰か忘れものでもしたのかと思つて、

そのまま玄関へパタパタ走つて行き、のぞき穴からのぞいてみると、そこにはみかが立つっていた。

何忘れたんだろ？

首をかしげつつ鍵を力チャリと開けた途端、

ものすごい勢いでドアが開いて。

「おじやまします！」

その勢いに圧倒されて、呆然とする私を玄関に置き去りにして、

みかはさつとと靴を脱ぎ、リビングへと突き進んでいく。

「ちょっとお、みかー？」

慌てて鍵をかけ、追いかけて行くと、みかはソファの真ん中に沈む

ようになんぞり返っていた。

「かりん、そこ座つて！」

「何？なんか怒つてるような・・・。

「みか、忘れ物取りに来たんじや・・・。」

「いいから座つて！」

何がなんだかわからないけど、どうも戻ってきた理由は別にあるらしい。

座らなきゃ何も始まりそうにないの、言われるままにその場に腰をおろした。

「かりん、あたしに隠してあるよー。」

「え！？」

「あるよねー！』

「さつか、・・・全部話してないよね？」

「な、何言つてんの、やだなー、ははは。」

なんでもつかひとつとつまく笑えないんだ。

自分でもイヤになるくらー、ウソツくの下手なんだよね。

「はあ・・・。」

みかは呆れたように大きくため息をつき、

「あたしら何年付き合つてると思つてるの？

あんだけ挙動不審な態度ひとつとて、バレてないとでも思つてゐるわけ？」

腕組みしてこいつを睨んでくるみかに、どんないいわけしても通用しない気がして、

一言も言い返せない。

「肝心なトコ、何にも言つてないんじやないの？」

子供に言い聞かせるような、ゆつくりした口調で。急に優しい声出して、ズルイなあ。

つていうか、私の扱い方、わかってるつて感じで。

「みかりん・・・。」

「その呼び方ヤメテ！..」

「もしかして、わざわざそれ言つたために、戻つてきてくれたの？」
「そーよ！アンタに洗いざらい白状させなきゃ、来た甲斐がないじゃない。」

「・・・みかりん、ありがとおつ！」

じーんと来ちゃつて、思わず抱きついた私の頭をよしよししながら、「どつからどこまでがホントなの？」

かりんはわけもなくウソついたりしないと思つから、なんか理由があるんだとは思うけど・・・。

ゆつくりでいいから、話せるといから話してみな？」

何をどういう順番で話したのか、思いだせないくらい、自分でも支離滅裂だつたと思つ。

とにかく思いつくまま一気にしゃべり続け、

心配したみかに途中でジュースを手渡された。

全部話し終えて完全に脱力している私の上から、

「お疲れさま。」

みかの声が聞こえた。

「大変だつたんだねえ。

かりんは免疫ないから、相当ショックだつたんじゃない？

修兄の、そういう『男』な部分、知つちゃつて。」

「・・・わかんない。

その時はコワイつて思つたんだけどね、

何でかな、ちょっと修兄に近づけたよつた、なんか嬉しいよつた気持ちに変わつてつたの。

だけど、ホントは全然、近づけたなんかなくて・・・、

たぶんあの時、修兄は、

「私じゃなくともよかつたんだと思つ。」

「かりん・・・。」

自分で言つてて情けなくなつてきちゃつて、泣きそうになるのを誤魔化すように立ち上がると、

「『う。』

と、Tシャツの裾をくいと引っ張られ、

「泣くんだつたら、今だよ。

ちゃんと泣いとかないと、後々引きずるんだからね。」

「ウソ！？」

「ホント。失恋の達人が言つてるんだから、信じなさい。」

「みか・・・。」

せつからく我慢したのに、熱いものが喉の奥からこみ上げて来て。
「しょうがないな・・・。

私今日、昼からデートなんだけど、

付き合つたげるから。」

「・・・いいの？ヒロ君怒んない？」

「いいの、いいの！

かりんだつて、いつつも付き合つてくれたじやん？」

「ああ！・・・ヤケ酒ならぬヤケカラオケとか？」

「そうそう、ヤケマックとかね。」

「くくつ。あつた、あつた！..」

こんなふうに泣きながら笑えてる自分が不思議だつた。
だいたい泣くつもりなんて全然なかつたのに、
泣きたいなんて、思つてもなかつたのに・・・。

みかに言われるまで、気付きもしなかつた。

「かりんはすぐ平氣な顔しようとするから・・・。

あんたの『大丈夫』は、大丈夫じゃない時なの！

でしょ？」

泣いたからなのか、ちゃんと全部話したからなのか、

みかが帰る頃には、私は信じられないくらい、すつきりした気分だ
つた。

テーブルの上に散乱しているお笑いDVDを、きちんと積み上げな
がら、

友達つてありがたいなつて、ホント心から、そつ思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9490c/>

Summer Vacation

2010年10月26日09時03分発行